

21 世紀社会デザイン研究学会

12 月 4 日 (土)

基調講演とパネルディスカッション (議事録)

跡見学園女子大学文京キャンパス M2605

目次

1. 会長挨拶 (北山 晴一会長) : 13:15~13:30.....	1
2. 基調講演 (内山 節 立教大学教授) : 13:30~14:20.....	5
3. パネルディスカッション : 14:30~17:00.....	16
3.1 村上 千里氏 (認定 NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議 ESD-J 理事)	17
3.2 甲斐 徹郎氏 ((株) チームネット 代表取締役) (代理、清水氏)	23
3.3 吉村 英子氏 (跡見学園女子大学教授)	25
3.4 中村 陽一氏 (立教大学教授)	33
3.5 ディスカッション	39

1. 会長挨拶 (北山 晴一会長) : 13:15~13:30

北山 学会の会長の北山と申します。よろしくお願ひ致します。学会は、皆さん御存じのように、2006 年の 6 月に設立されました。その年の 12 月に第 1 回の大会を行いました。それ以降、昨年までの 4 回までは立教大学で行ってききましたが、今回は、初めて、跡見学園女子大学で開催することができました。跡見学園女子大学の関係者の方には大変感謝をしております。初めての立教以外での学会開催になります。これがきっかけとなりまして、今後のますますの学会の発展につながっていけばと願っております。

今までと違って、若干学会らしいあいさつをできないかというふうに考えまして、少しお話をさせていただきます。今回のテーマは「自然と共生する社会デザイン」というふうになっていますけれども、少しばかり私のほうで、社会デザインに引き付けた形でお話をさせていただきます。最近では、色んなところで社会デザインあるいは社会システムデザインという言葉が言われています。あるいはシステムデザイン、と単純に社会を取った形でもいわれています。それから、世の中では、ソーシャルっていうことが、ある種の流行になりつつあるという雰囲気もあります。社会の中の社会デザイン、なぜ今社会デザインなのかということについて、タイトルを付けて、少しお話をさせていただきます。

社会デザインやソーシャルデザイン、あるいは、それを人格化した形でソーシャルデザイナーという言葉がネットで引いてみました。その前に、ほかに非常に近い言葉として、ソーシャルコンセプトとか、ソーシャルイノベーションとかいう言葉もあるので、これでネットで引きますと、大変ヒット致します。インターネットで検索してみましたら、ヒット数がこういう形になっています。ソーシャルデザインというキーワードですと、ヤフーだと約 3430 万件が出ます。それからグーグルですと 1 億 8500 万件出るのですよね。これは日々この数が急速に増えていると思うのですね。これは 11 月 20 日くらいの数字ですが、ソーシャルデザイン立教で引くと、5670 件とがぼって減りますけれども、それでもこれくらいあるのですね。皆さんがこれで検索していただくと、ヒット数がどんどん増えていきます。ぜひお願いしたいです。ソーシャルデザイナーで引くと 3340 万件出ます。ところが、ソーシャルデザインカフェソボロというのがあって。このヒット数がすごいですね。これは、京都の烏丸御池にあるランチとスイーツが非常においしいお店なのだそうだけれども、ソーシャルデザインソボロ、カフェソボロっていうと、5000 万件のヒットが出ます。ところが、ソーシャルデザインレビューで引くと、これがヒットゼロ。誰もネットで検索しようとしている人がいないということなのです。私がこの間検索しましたから、多分数千とかあるいは数十件になっていると思いますけれども、こういう状況なんですね。いずれにしてもソーシャルデザインっていう言葉が世界的に使われる用語になりつつあるということは確実です。10 年前に同じようなことやってみたのですが出ませんでした。あっという間に増えました。

少しさかのぼってどんな人が本を書いているのかということで、アマゾンで引いてみますと、こういうものが出ます。ロバートソーマー(Robert Sommer)という人の **Social design: Creating buildings with people in mind** という本があります。これの中身を少し調べてみますと、色んなことが書かれてあるのですが、ソーマーという人は、実はこれ学会誌の巻頭言のところに大分書いてありますので、それをご覧になっていただいてもいいんですが、またあとでご覧になってください。

これは 1983 年に出た本なのですが色んなことを言っています。彼はもともと社会心理学というか、臨床心理の専門家で、環境についても、都市デザインなどを含めてだと思えるのですけれども、色々なことをやってきていて、カルフォルニア・パークレイで都市とか建築についても教授をしていたことがある人です。もともとはですね、心理学、臨床の人ですね。アメリカ合衆国だけではなくてカナダなどでも実際に病院の中で仕事をしていた経験がある人です。

彼が、面白いことを言っていて、**formalistic design** というのは、それに対してソーシャルデザインっていうものを並べてお話しているのですが、**formalistic design** というのは彼によりますと、ラージスケールで、ナショナルとかインターナショナルを掲げてやるものであり、非常に制度的な側面が強いということなのだと思えます。それからハイテクですね。それから **institution oriented** ということも言っていて、システムあるいは制

度をどういうふうにデザインするかということが、**formalistic design** の中心的な関心事だということも言っています。それから **owner is excluded client** と、これもお客さんにどうやって満足してもらえるかという、顧客満足ということを行っています。では顧客は誰なのかということも問題になるわけですが、注文者ということですね。それから、**concerned with**・・・これは、デザインそのものの方を重要視するということをいっていることだということです。いずれにしても、建築家として、自分のデザインがどのように良いかということを非常に先進的であるかということが中心的な課題です。それからお金がたくさんかかっても構わないということです。そのほうが自分の取り分増えるわけですから。そういうことも非常に特徴的に表れていると。それからトップダウンデザインアプローチということも言っています。それから、コンセプトとして非常に **excluded** だということも言っています。それから非常に上位下達的な形でのコンセプトだということも言っています。

これに対して、では、ソーシャルデザインは何かということに彼は対比しているわけで、スモールスケールで、それからローカルが中心になるということですね。それから **appropriate technology** と、その場その場というわけではないのですけれども、個別の条件にあった形でのテクノロジーを使うのだということですね。例えば、色んな素材とか、あるいはそのストックとか色んなことを考えて、難しい時にはその場で調達できるようなものとかということも含むものだと思います。それから **human oriented** と言いますね。それから、クライアントは **be defined to include users** となっています。あくまでユーザーを含めた形でやるのですね、デザインはユーザーを含めてお客さんだという考え方を説いております。それからミーニング（意味）とコンテキストを重視した形でのデザインをつくるのだという。例えば建物を建てても、その中で何をやるのか、誰がやるのかっていうことですね。その建物はどのような場所にあるのかっていうことを考えながら、デザインをするってのがソーシャルデザインだということですね。

それからボトムアップだということも言っています。それから **inclusive design** というものを、最近そういう言葉がよく使われるようになりましたけども、それについても、彼は 1983 年の段階で言っています。それから非常に権威的ではなく、デモクラティックなプロセスを採るってということですね。真ん中は、ユーザーを含めた形でのお客さんだと。建物の所有者とかですね、注文者だけではないのだということですね。ということは、先ほども出ましたけども、**Creating buildings with people in mind** ということで、誰が使うかということに常に念頭に置きながらその建物を建てていく、そういうことを言っているわけですね。我々も今考えても、非常にヒントになることですね。示唆に富むことをいっぱい言っているわけです。

けれども、ちょっと考えていただきたいのですが、社会デザインで意味内容というのは何なのか。デザインがもう明らかに、世界的に、例えば **architecture for humanity** とか、ヒューマニティーとかソーシャルを付けた動きがたくさんあります。その時にデザインという言葉がよく出てくるのですが、それはデザイナー(建築家、プランナー、デザイナ

一等)たちの社会的自己実現だっということが中心ですね。職業的な専門家集団があつて、彼らがどういう形で社会的な貢献をできるかということを行っている。それを彼らなりにソーシャルデザインという言葉を使っているということですね。その場合にアクターは誰かということなんですけども、この場合は専門性と専門家、専門性という知識と専門家が一番中心と言いますか、一番下にあると思うんですね。そこから上にあがっていくという形なのですけども。それから、にも関わらずソーサーたちが言っているように当事者ということをも十分考える必要があると。クライアントはですね、注文者とか所有者ということだけではなくて、誰が使うかっていうことも考えて、それから市民も入れた形でのいうのがあるのです。

それと、我々の考える社会デザインは同じなのか違うのかっていうことをぜひ考えていただきたいと思いますね。専門家の知識あるいは専門性という言葉ですね、非常に大事であると。しかし、それを言っただけでいいのだろうかということが非常に大きな問題だと思います。社会をデザインすると、私自身の個人的な考えで言いますと、社会デザイン、あるいは社会デザイナーといった時には、社会をデザインするということがまずあつて、そこに必要であればさまざまな専門家、専門的な知が結集してくる。自分たちだけで十分でない場合にはネットワークを組むという形でもって、ハブをたくさん作る形でもって知を結集していくと。あくまでも社会をいかにデザインするかということが中心だとすると、誰がアクターなのかということをお客さんに問いかけておきたいと思います。誰なのでしょうかとということなのですね。答えは皆さんぜひ考えていただきたいと思います。

今回のテーマは、「自然と共生する社会デザイン」ということです。早速ですが、今日の賢者の皆さんにマイクをお渡ししたいと思います。先ほどお話ししましたように少し私たちが考える社会デザインというのは何かということを考えていただきたい。今日、内山節さんの基調講演にもそういったことも含めた形での問題提起、注意喚起があるかと思います。ちょうど15分ぐらいになりましたので、私のあいさつはここで一応終了させていただきたいと思います。よろしくお願ひ致します。では内山さん、お願ひ致します。

宮崎 どうもありがとうございました。もうディスカッションが始まっているような気分になってきました。では最初に、内山節先生から基調講演をお願いしたいと思います。私から紹介するまでもなく、哲学者として大変著名な方で、1950年に東京都にお生まれになって、1970年ごろから東京と群馬県の山村の上野村とで二重生活をされているということです。NPO法人の森づくりフォーラムの代表理事をされていて、立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科の教授をされております。著書は多数ありまして、配布した資料に一覧表がありますけれども、例えば最近の著作では「共同体の基礎理論」という著書があります。きょうは、「自然から見た社会デザイン」というテーマで基調講演をしていただきますのでどうかよろしくお願ひ致します。

2. 基調講演（内山 節 立教大学教授）：13:30～14:20

自然からみた社会デザイン

内山 50 分間ぐらい時間をいただいておりますので、その時間を使いましてお話をさせていただきます。

ただ今紹介されたように私、40 年近く、群馬県の上野村っていう山村と、東京との二重生活をしています。本拠地は上野村ですけども、用事が終われば上野村に帰るっていう、そういう生活をやっています。

1 週間ほど前の日曜日ですけども、上野村で結婚式がありまして、新郎は上野村出身の若者で、新婦は東京出身の女性ですが、その 2 人が伝統的な上野村の昔の結婚式を復元したいという希望を持っていて、1 年間われわれも含めて協力しながら準備をいたしました。昔の結婚式も知っている人たちが、その昔の結婚式が挙げた人たちがもう 80 過ぎになっているという状況です。50 年間ぐらい、そういう結婚式はなかった。そうしますと、準備でも、例えば料理が何を出して、どういう順序で出して、その料理が一つずつ意味があるわけですけども、どう意味が付与されているのかとか、その全容を知っている人たちがもう 90 歳を超えているということです。記憶を戻すために一生けん命でしたが、私もそういう結婚式ですから紋付き袴（はかま）でいくという、別に強制されたわけじゃないんですけども、村の人たちは半分ぐらいは紋付き袴っていう話だったんで、僕も少し気合を入れてそういたしました。

その結婚式も、今の結婚式と違うという点でいえば、もちろんやり方も全く違いますけれども、うちの村の結婚式では、花嫁さん側の家でまず結婚式を始めて、途中で出ていき、花嫁行列を作って、夫の家に行って、後半の結婚式っていう、そういう 1 日がかりの結婚式なのです。夫の家に入る前に、路上に食べ物を供えまして、フェミストっていう人たちには怒られるかもしれませんが、台所の神様に、これから入るといふことの許可を、あの新婦がお願いをするっていうのです。そういう儀式があつたりして、その結婚していきます。この結婚式では実は、誰もデザイナーがいないのですね。

今の結婚式は、式場の結婚式ということになりますと、誰かのデザイナーがいて、それから新郎新婦などの希望しながら、じゃあこういうプログラムをしましょうという形でやる。むしろ大変な予算を付ければ、もっとすごいデザイナーが出てきて、世界に一つしかない結婚式っていうのをプロデュースしてくれるかもしれないです。

それに対しては、伝統的な上野村の結婚式になりますと、ごく自然にいつの間にか出来あがったもので、特に誰かがデザインしたわけではない。それがずっと受け継がれてきたんですけども、50 年間ぐらい中断して、それで、この 2 人がこれを機会に何とか、やはり結婚式となると村ならではの結婚式のあり方がありますので、それを残したいということで、そういうことになりました。

上野村には上野テレビという、局員3人のテレビ局があるのです。多分日本で初めてこの地区で結婚式の様子をすべて生中継するということですね。ただし上野村の中でしか見られませんけれども。

この問題、つまり誰がデザインしたわけでもないが、出来あがっていて、そういうもののあり方の中に、私たち今非常に貴重なものを感じている訳です。例えば農山村の景色は、これもまた誰もデザインをしていない景色です。つまりそこに住んだ人たちが勝手に作ったものです。道を作ったり、そこに川が流れていて氾濫しやすかったら自分たちで堤防を作ったり、あるいはそこから水路を引いて水田に水を入れたり。周りを包んでいる森では、人々は生活の中で使っている道、手前のほうや人家に近いほうの森は、最近では里山とかよく使いますけれども、人間が、何度も何度も使ってきたが故に生まれた一つの植生が作られてきた。それから奥のほうに行くと、それほど頻繁には使ってきませんでしたから、もう少し深い奥山の景観がある。この景色全体っていうのは今申し上げたように誰も、デザインをしてこなかった。にも関わらず、今そういうところを訪れますと、私たちがそこにきれいだとか、あるいは気持ちが安らぐとか、とってもいいあるデザインを感じる訳です。誰もしなかったのにそこに良いデザインがある。

それに対して、きょう東北新幹線が青森までつながったなんていうニュースがあるようですけれども、おそらく青森の駅前もこの後10年か20年していきますと、新青森駅は元の青森駅から離れていますから、ビルが建って来て、それなりの景観ができていくんだろうと思います。しかし青森の方には大変申し訳ないけれども、これから新しくできていく新青森駅計画というのはあまり期待が持てない景観が出来あがっていくのではないかと。かつて新幹線の駅ができて、その街が再開発されて、率直に言ってろくでもない町ができていったというふうにも言っても良いわけです。そこに行っても、なごむものもないし、美しいものもない。しかし、多分この景観には多くのデザイナーたちが関与して、ビルを作る時にも建築家の人たちが一応景観を考えたりしてやってるのでしょうか。それからおそらくその区画整備をしている時にも、なんらかのデザイナーが関与している。そういう点では、それら人たち自身は決して変な景色を作ろうと思ってやってるわけではないわけで、色んな勉強をして、できるだけ良い町を作ろうとやってるはずなんです。けれども、人為的に作られた場所は、さほど良くはないとか、もっと言ってしまうと、時間がたつてくると劣化していく町を作っている。

それに対して、農山村の景観というのは、時間と共に劣化しない。ただ1軒1軒の家は古くなっていきますけれども、古くなってなおのこと一つの景色として、馴染(なじ)んでいく。そうすると、デザイナーが関与をしていないのにできている景観と、デザイナーが関与をして一生懸命努力をしたが大したものができないこととの違いが一体どこにあるんだろうかということは、大変答え出すのは難しいけれども、大事なことだと気がします。

今回のテーマには自然という問題が入っているけれども、自然というのは、私たちが直接触れてる自然であれ、あるいは、本等を通して勉強をした自然であれ、自然の全容は人

間たちが知らないという、実に不思議な存在です。つまり私の場合には、上野村の自然ということになるとある程度は分かるけれども、上野村は大変山が深いところですから、山の中をくまなく歩き回っているわけではないので、私が特に知っている地区は本当に家の近所の自然ぐらいしか実は知らないんです。

しかも、実は、そこに暮らしている例えば動物たちはかなり広く移動をしますから、例えば最近問題になるクマなんか結構広い範囲を移動してきている。そうすると、自分の居住地にクマが出てきた時だけ私たちはクマの存在を知るわけですけども、クマの生活の全容を知らない。なぜクマが最近多く出てくるかは、ほとんど誰も知らないのに、分かったような議論だけが行われている。村に住んでいる人間としてはなほだ不思議でならないのは、例えば、旧里山部分が荒れているからクマが出てくるという。そんなばかなことしか言いようがないのかという気がしますが、つまり、旧里山部分がきちんと管理されていたら、そういうところはどんぐり系の木が多いですから、むしろクマたちは喜んで旧里山へ出てくる。そこが境界線だという認識は動物にはない。チャンスがあれば下まで降りるとするのは当然のことであって、里山整備をしておけば、そこが境界となって下りてこなくなる、というのは誰が言い出したんだろうっていう気がするんですけど、最近では本を読んでもテレビを見ても、そんなことが書いてある。

さらに言えば、旧里山っていうのは、昔の薪炭林、つまり薪（まき）を採ったり炭を採ったりする、そういう山であるとよく色んなところで書かれているけれど、薪炭林なんて言葉は誰が作ったのだろうとしか思いようがない。というのは、村に住んでいればすぐ分かるけれども、薪を採る山と炭を焼く山は全く違う山です。薪炭林という利用方法はない。なぜならば、薪は生木で下ってきて燃やすわけですから、非常に重い。ですから家のすぐ近くから採りたい。もうできたら庭から採りたいぐらいのほうが本音なわけです。

それに対して炭っていうのはいっぺん焼いてしまいますから、そうすると軽くなる。今の私たちにとったら無理かもしれませんが、昔は小学生でも炭俵で3俵ぐらい背負って山を降りたんです。だから運ぶのは簡単であった。それに対して、炭っていうのは商品として売れるもの、薪もたまには売れますけれども、それは都市に近いところへたまに移動しているやつで、薪というものは自分の生活で使うもの。それに対して炭は売れるものとなりますと、炭のほうは品質が大変重要になってくるわけです。いかにして高いものを焼くかって。そうすると、この辺でしたらば、コナラあたりが一番良いと思いますけれども、関東だったらコナラが一番高く売れる、あるいは紀伊半島だとウバメガシという有名なものもありますけれども、そういった木が生えている場所に炭窯は作るんです。ですから炭窯は決して家の近くに作るものではなくて、良い材料のある場所に作る。その炭を焼く人たちは炭窯は作れますから、大体2日もあれば十分に作れるんですね。そうすると、何もそんなに家の近くに作っても高く焼けないような炭を焼く必要は全くない。ですから、炭を焼く山はむしろ山奥なんです。良い木が生えている場所、炭にとって良い木ですけど。それに対して薪は1メートルでも近いところから採りたい。そういうことから、薪炭林などと

というのは世の中に存在しない。ところが誰かが、里山が旧薪炭林って言い出したのが、いつの間にかそれが社会の公用語になって、里山語で使われているという、不思議な現象を見ました。

こういうことも、別にそれをからかっているわけではなく、私が本で読んだものであれ、あるいは直接触れたものであれ、実に自然のごく一部、しかも自然のごく一部でさえ多くの誤解を持って理解されている。私自身は上野村で日々付き合っている自然でさえ、それは人間が認識した自然ですから、自然そのものではない。ですからそこには多くの誤解が存在しているという可能性は十分あるわけです。自然というのは、結局全体的な自然は分からないものとしてあって、私たちが多少なりとも本であれ、直接であれ知ることができるものは絶えずローカルな自然としてしかない。しかもその自然の中身を少し知っていこうとすると、それは結局自然と人間が関係を作るからこそ理解されていく。

例えば山に入って木を切ろうとか、秋にきのこを採ろうとか、そういう形も含め、何らかの関係を作っていく時に、そこに自然と自然が関係している世界っていうのがあるかもしれない。その関係を通して私たちは自然を認識するわけですが、その認識できる自然っていうものは今申した通りローカルなものであり、そのローカルな認識された自然さえ、絶えず誤解を生みながらおそらく認識されている。

そうすると自然とは何かっていう問いは、大変難しい問いになってくる訳で、人々はどんなふうに自然を認識してきたのかということは、語るのですが、そもそも自然とは何なのかということ語るということは、大変な困難を伴うと思ったほうが良い。

では、人々はどんなふうに自然をとらえてきたのかということになりますと、日本において自然とは何だろうかということになるんですが、これは最近ではよく知られているように、自然という単語は伝統的には普通「ジネン」と読んできた単語で、これは大変古い言葉で、ジネンの意味は「おのずから然（しか）り」、これ訓で読んだ意味なんです。一般的には「おのずから」という意味合いで使ってきた言葉で、今私たちが自然の成り行きとか自然にそうなったとか、それが昔のジネンの使い方に近いというふうに思っただけであれば良い。それに対して明治になりまして、外来語の「自然」、英語で言えばネーチャーですけれども、それを翻訳する時、日本語に適する言葉がなかった。なぜならば日本の人たちは実は自然と人間を分けるという習慣がなかった。それで、あの人がいるっていうのと同じようにあの山があったり、あの森があったり、あの川があったり、あるいはあの動物がいたりしていくだけであって、自然界と人間界っていう二分法はなかった。ですから、翻訳する時に、訳語がないというんで、非常に苦労した。その結果「おのずから」っていう意味合いで使われていた自然っていう言葉を、ジネンっていう言葉をシゼンと呼んで訳語にしたという。それが明治に起きた一つの経緯である。

ただ、一応申し上げておくと、実は鎌倉時代くらいからこの字をシゼンと読むケースがあって、例外的なケースでした。江戸時代ぐらいになりますと、一般的にはジネンなんですけど、たまにはシゼンと呼んで使うというところでもありました。ただし、どういう意

味かっていうと、「突然に」という形容詞、副詞的な使い方、突然にという意味でこの漢字をつかうきはシゼンと読み、それに対して「おのずから」という意味で使われる時にはジネンという傾向がありました。

どうして、おのずからと突然にという、全く違う意味合いの言葉を同じ漢字で読み方の違いだけで言ったのかということなんですけども、実は、この二つにそんなに大きな違いはなかったということです。というのは、例えば、この後1時間後に突然嵐がやってきて、暴風雨になってしまう。そうすると私たちは、こんなに晴れていたのに何で突然嵐になったんだろうっていうふうに認識するわけですけども、それはその原因を私たちが知らないからです。

もしも原因がちゃんと分かっていると、例えば突然大きな低気圧が発生し、ここら辺が暴風雨になるという原因がよく分かっていたらそれは突然に嵐になったわけではなくて、おのずから嵐になった。理由が分からないから突然に来た。分かっただけでおのずからであるというんです。だから、突然に誰かが怒り始めた。それは、突然と感じるのは、彼や彼女が怒ってる、その何を怒ってるのかよく分からない。何であの人は急に怒り始めたんだろうと。ところがその前から実は理由があって怒る原因があったと。それがついに爆発して怒り始めたということになりますと、突然じゃなくしておのずからになるわけです。ですから、突然に起きる事象というものは、すべてよく調べてみれば必ずおのずからの理由があるというふうに人々は考えていたので、もちろんその理由というのは、今の私たちだったら、突然に嵐になれば、気圧がどう変わってとか、低気圧が発生してとか、そういう形でおのずから理解するわけですけども、昔の人だったら、そこに、神様が怒ったということだったのかもしれない。ともかく何らかのおのずからの理由があってこそ突然に発生する、つまり、人間のほうに分からないから突然になる。人間の認識というものが絶えず不十分であると言えます。そういうことに対するいわば謙虚な気持ちがあるということです。

そんな形で使った言葉が明治になりますと、シゼンという今の読み仮名になった。その伝統的なジネンという言葉は、実は、人間の自然観と自然とを強く結んでいた。だから、先ほど言った通り、自然と人間を分けるっていう精神的な背後っていうのはありませんから、その自然の動きを見ながら人間とは何かを見ている。そこに一体的な認識の世界があったということです。

実はおのずからっていうことは、人間にも当てはめられたわけで、つまり人間の生き方として一番良い生き方、それを日本の民衆たちは、おのずからのままに生きるという、そういう精神としてつかんでいた。だから、おのずからのままに生まれて、おのずからのままに育って、おのずからのままに仕事をして、おのずからのままにいつかは亡くなっていくっていう、そういう人間の存在の仕方に一つの理想を見ていた。

それに関して、現実の人間は決してそうはならない。というのは、人間は自分というものを持っている。それは私ととってもいいし、自我ととってもいいし、個ととってもいい

し、個我といってもいいし、何て言う言葉使ってもいいんですけども、ともかく、「自分ならでは」という、そういうものを持っている。そうすると、自分の主張ができますし、それから自分の目的も出てくる。目的が出るというのは、それを実現しようとして何か始める。そういうことが、結局人間をおのずからのままに生きる動物にさせなくしてしまう。つまり、自分があるから、結局おのずからのままに暮らしておのずからのままに死んでいくということでは我慢できなくなる。人によっては、場合によっては金持ちになりたいとか、偉くなりたいとか、そういう色んなことを含めましてですね、何かことを始める。結局それはおのずからのから外れている。

ここに、ヨーロッパ系が生んだ思想と日本の思想の一つの根本的な違いがあるわけで、ヨーロッパ社会の生んだ思想というのは、人間はむしろ自分というものを持ってからこそ、自我というものを持ってからこそ主体的に生きることができて、そのことによって文化や文明を発展させて、そして、辛抱したり発展したりするという、そういうものをするができるようになるというふうに肯定的にとらえている。

それに対して、日本の思想というものは、伝統的には、そんなものを持ってからおのずからのままに生きることができなくなっていくという、むしろ、否定的にとらえている。だから理想はおのずからのほうにある。そういうふうな視点で見ていくと自然というものは、人間たちには、おのずからのままに生きている世界というふうに見えた。だから、自然のほうに真理を体現してるといえる部分があって、それに対して人間のほうは、自分を持って自分を主張しながら生きてるが故に真理から外れていく。つまりおのずからという生き方から外れていく。そういう呼び方をしている。

こういうことってというのは、何が正しいか間違ってるかっていうことじゃなくて、人々がそういう気持ちを持ちながら自然を見つめる。そして人間を見つめていたという、そのことだけを確認しておけば良いかなと思います。だからこそ日本には自然信仰が発生する。つまり純粋におのずからのままに生きてる世界、それに自然を見ていて、そこに、真理があるというふうを考える。それに対して人間は、今言ったように自己主張しながら生きてるわけですから、その真理から外れていく。だから、一つの間人観というのと自然観っていうものを、一体的に見ていく世代があったっていうふうにも考えてもらえればいいと思っています。

ただ、自己というものを持って、自己を主張しながら生きるっていうことを、決して日本の伝統的な民衆思想は肯定しないんですけども、しかしはっきり言うと否定もしきってないです。なぜならば、良かろうと悪かろうとも、そういうものを持って生きているのが人間だという、そういう思いを持っていた。それを捨てるっていうことになると、できるかどうか分かりませんが、禅宗で言えば長い座禅を組んで悟りを開くとかですね。悟りを開くっていうのは自己を伏せるっていうことですから、あるいは自然に帰るっていうことですから、そうすると、そうやって苦行を積んで、自意識を捨てるっていう。それが本当にできるかどうか分かりませんが、そういう道をやろうと思えば探ることになる。

ただしそれはもちろん全員ができることではなくて、できたとしてもほんの1人、2人の人たちが多分できる話に違いない。

そうすると、多くの人たちは、否定的に見ていたとしても、やっぱり自分というものを持って生きてるっていうことになるわけであり、そこをどうするかというところで、日本の思想っていうものは、人間というのは哀しきものというとらえ方をしていく。つまり、哀しきものってとらえることによって、肯定はしないけど、否定をして、それをつぶしてしまいなさいとも言わないっていう。むしろ、人間の持っている哀しさを見つめながら生きなさいというですね。そういうふうな形で、非常に優しいというか、本来は奥行きが深いですから怖いかもかもしれませんが、そういう発想になっていく。

ですので、日本の哲学と、欧米、ヨーロッパ社会が生んで世界に広がった哲学の根本的な違いっていうのは、物事の核心を語ってこうとすると、ヨーロッパ社会の生んだ哲学っていうのは、その核心の部分を論理的に語ろうとします。それに対して日本の哲学っていうのは、核心に迫ると突然文学的になる。つまり、人間は悲しき存在であるとかですね、分かるような分からないような形でいう、全然論理性を持ってないですね。それが日本の思想の一つの特徴でもあります。そんな思いを持ちながら人間たちは生きていた。ですから、社会観っていうのも全く違うわけです。

例えば、自治っていう言葉を使いますと、私、ヨーロッパ社会が生んだ自治の概念っていうのは、原理的には極めて単純だと思うわけです。それは何かというと、生きている人間たちの自治である。それは、社会観が生きている人間たちの社会として、一応枠組みが作られている。そうするとその生きている人間たちが自治をする。原理的には簡単だって言ったのは、生きている人間達が集まってきて、良く議論をして、自分たちのルールを作って、そしてそのルールに基づいて、義務や権利を行使していくというですね。そういうことによって、自治観ができていく。

それに対して、日本の伝統的な自治観は非常にややこしいのですよ。なぜかと言いますと、社会の構成メンバー自体の中に一つの自然が入ってくる。日本の伝統的な村とか町とか、あるいは集落っていう言葉は決して人間社会を指す言葉ではなくて、自然と人間の社会を指す言葉です。だから、自然というものが分けられることなく、自治の構成メンバーとして入ってくる。

それからもう一つは死者が自治の構成メンバーとして入ってくる。それは、地域社会を作ってきた先輩たちと言ってもいいんですけど、そういう人たちが、御先祖さまというような形で認識されていると。御先祖さまは、亡くなった人ではあるんだけど、絶えずこの社会で自分たちを守ってるし、また、その御先祖さまを含めて、社会が構成されているというのが日本の社会観なわけです。そうすると、そこで自治をやろうとすると、生きている人間たちだけで決めてしまったらいけないとなるわけで、自然の意見を反映しなければいけないようになってくるし、死者の意見を反映しなければいけないという、ややこしいことになってくる。ところが言うまでもなく、最終的に何かを決める時には行きてる人間たちで決

めざるを得ないわけで、死者や自然は会議に来て議論してくれないわけです。そうすると、発言をしてくれない人たちの意見を含めて自治のあり方を決めるということは、どういう方法を使っていくのかということになる。

その時に、祭りとか、年中行事の役割が出てくるわけで、つまり、祭りを通して絶えず自然を呼ぶ、自然を神々として呼びこんでいく。そのことによって私たちがどういう世界に生きているのかを、絶えず掴み直す。あるいは、お盆になると御先祖さまが家に帰ってくるとかですね。それから正月っていうのはもともと、土地の神様と御先祖さまが家にくる日で、ですから、玄関のところにしめ縄をはる。しめ縄をはるっていうのは結界を張るわけで、ここから内側は正月の間だけは神様の領域であるって、そのことを示すことです。ですから、そうやって、絶えず神様を家に呼んできたり、御先祖さまを家に呼んできたりして行事を繰り返していく。ですから、1年間にはたくさん昔は年中行事があつて、うちの村でも聞いてみると、20から30くらいあつたらしいのです。比較的忙しくない農閑期になってくると、本当に3日にいっぺんくらい何か行事やってる時期もあつたみたいです。

そういうことを絶えず繰り返しながら、今日的な言い方をすれば、生きてる人間たちが、自然や死者たちの代理人としての役割を果たしている。その有り様を作っていないと日本の自治はできないわけで、ですから、お祭りっていうのは単なるイベントではなくて、自治の中に組み込まれた非常に重要な仕組みです。あるいは年中行事もそうです。ですので、そういうことを含めて自治をするから、日本の伝統的な自治は極めて分かりにくい。

しかもそのやり方は極めてローカルなものであつて、その土地その土地のやり方に従うしかないということがあります。そういう中で人々は自然と共に生きてきたし、自分たちの生きていく時空、あるいは空間、村、そういうものを作りだしてきたわけです。

その結果作られてきた景観を見てると、今私たちは、そこに、結構美しい景観を見たり、そしてあるいは、気持ちが休まる景観を見たりする。それに対して、これから多分進むであろう新青森駅の駅前開発というような部分も、それはまさに生きてる人間たちが、いわば知性の限りをつくして、つまり個の仕事としてとしてね、まず仕事を成していく。そうするとそういうものは急激に劣化していくし、場合によつたらば、数十年たつたらば、何というものを作ってくれたという、そういうことが起きるかもしれない。

それに対して、さっき言ったその村の景観、そちら側はデザイナーはいない。デザイナーはいないんだけど、その今言ったようなことを念頭に入れながら生きてきた人間たち、その人たちがまさにこう、おのずからのままに作りだしてきた景観なわけです。

ここに、社会デザインというものを考えていく時の、私の問題意識みたいなものがあるんです。それは何かっていうと、伝統的な社会デザインというものがあるとするならば、その多くのもの、しかもその民衆時点で行われてきたっていうのは、実はそのさっき言ったようにデザイナーもいないしですね、何もいない。だけれどそこにおいて、主体と言えるものが何だったのかということになると、関係そのものが一つの主体として働いた。その関係っていうのは、例えば昔の村でしたらば、自然と人間の関係があります。そしてま

た、生きてる人間と死者との関係があります。さらには、もちろん生きてる人間同士の関係も大変濃密なんですけれども、そういうのもあって、そこには同時に例えば各国との歴史との関係もあるし、そこに実に色んなものがあるわけです。

例えば歴史っていう言葉を使うと、今私たちは何となく、年表的な歴史を思い浮かべる。それは、最近の歴史教科書からは削除し始められましたけども、645年に大化の改新があったとかですね、大化の改新はなかったということで今歴史学が大変になってきちゃったのです。今削除中っていう感じなんですけども、その前には聖徳太子はいなかったっていうことで、聖徳太子が教科書から削除されたっていうような事件がありましたけども、ついこの前に私たちが習ったことが違ってきたなどは思います。ただそれはともかくとしてね、645年に大化の改新があったかなかったは別としてですね、そういうものがあつたとか、それから1600年に関ヶ原の戦いがあったとか、そんなような感じで、私たちは、何となく歴史っていう言葉を一般的に使うっていういます。ところが、村の人間たちが歴史っていう言葉を使う時の歴史っていう言葉の意味っていうのは全く違うんです。それは、昔から人間たちはどうやって生きてきたのか。それを語る時に歴史があるわけです。

これは、しばしば色んな場面で出てまいります。何年か前にも近くの森がありまして、その森が少し、荒れてきてるっていういますか、そろそろ間伐をしたほうが良いっていう意見があります。それで、その森をどういうふうに扱おうかというのが、集落の寄りあいでもちょっと議論された。村っていうのは何かありますと集落の寄りあいを招集して、みんなして議論するというやり方をとますので。そしたところが、ちょっとみんなが迷っちゃったわけですね。すぐに、ああこうすればいいっていう結論が出なくて、ちょっとこれどう考えようか、こんな感じで、それでいていっぺん時間が「ぴっ」と止まったような感じになって、会場がしーんとして、みんながうーんと考えてる。

それで、3分たちますと、みんながまたしゃべり始める。その2、3分のいわば沈黙の時間ですけど、その時間でみんなの頭の中に何があつたかという、実は歴史をさかのぼってるわけですね。昔からあの森はどんなふうに使ってきたんだろうかと、どんなふうに使ってきたのだろうと。それは、自分の経験としては、例えば戦後のことしかかなりの年寄りでもほとんど分かりませんから、ですからせいぜい戦中ぐらいからです。その辺りをまず思い出して、それで昔からあそこはこんなふうにして管理してきたと。

ところが、それだけで十分じゃないんで、その後お父さんから聞いたりおばあさんから聞いたりしてきた話をみんなで思い出してるわけで、そのことによって、戦後はこんなふうに変ったけど、その前はこんなふうだったと、っていうのを、思い出していくって言いますか。さらには、伝えられてきた、場所によってはあその場所はいじっちゃいけないよとか、色んな言い伝えがありますから、そういうものを思い出す。

そんなことをやりながら、あの森っていうものはどんなふう管理していくのが、今までの歴史に反さないか、つまり今までの歴史と交じるのかっていう、そのことを実は瞬間的にみんな考えている。その答えが出てくると、大体みんなが口を開き始めて、いや、昔

はこうだったんだから今回もこれでいいんじゃないかとかですね、時には逆に昔からこうだったんだけど、時代が変わったのだから今回はこういうふうに変えたほうがいいんじゃないかって意見が出てくることもありますけど、とにかく絶えずいっぺん昔というものに戻すという思考をやっとおこなっている。それから、だから今こうしたほうがいい、あるいは変えたほうが良いという意見も出てくる。

そういう点でいうと、私は、上野村では、よそ者の扱いはされていなくて、40年ぐらいたつこともありますけど、うちの村は昔から人が結構移動してますので、初めからよそ者という概念がないという、その点では実に暮らしやすいところなんですけど、こういう議論になると、人は言わないけれども、ここはやっぱりよそ者だとか、新参者だなんていう気がする、つまり、何百年間も語り継いだ物語みたいなものを通してものを考えるっていうのはやっぱりできないわけで、せいぜい本で読んだ知識ぐらいで語るしかなくなっちゃうっていいですか、そういう点では、言われることはないけど新参者だなどいうふうに思ったりします。つまり、そういうふうに、過去の歴史というものが消えてしまう、何年にこういう事件が起きて終わってしまうという、そういう歴史ではなくて、ずーっと蓄積する、堆積（たいせき）する、そういう形で今の今までつながってる、それが歴史になるんです。

だから、迷ったらばそこに戻って、ものを考える。その上で、次の方法を考えるっていうようなことを行っている。結局そこで、うちの村では昔からどんなふうに森を使ったんだろうか、あるいは森を管理したんだろうか。その思いの中に入って来るのは、やはりそれは、生きている人間だけの論理であってはいけないわけで、結局それを見ることによって、その自然の側からも考える。それからもう一つは死者たちの側、つまり村を作った先輩たち、そういう人たちの意見というものもそこに取り込む。一つのそういう方法だというふうに理解していただいても結構です。

こういうことを考えていくと、最近では、関係をデザインするっていうのはよく聞く言葉なんですけれども、つまり、その例えば地域デザインっていうと、その地域に色んなこう、関係とかコミュニティとか、そういうものが生まれていくような形で地域デザインをやりなさいというわけです。こういう理論はよくあるんですけども、僕自身はそうではないだろうと思ってます。むしろそうではなくて、関係がデザインをしていくんだ。ただその関係がデザインしていく時に、その関係の中に入っていく人間たちが、いわばその、具体的にはデザイナー的な役割を果たすんだけど、それはあくまで、関係に突き動かされてデザインをしていくっていう。

だから、その関係が切れてる人たちがデザインをすると、一生懸命努力をしてもつまらないデザインしかできないという、そういう結果を見えています。ただ、関係がデザインするっていう言葉を使っていくと、その関係をどこでつかんでいくっていうことが、デザイナー側には要求されるわけです。その時に、一つは環境を知性でつかんでいるという、知性を通して関係をつかむという。例えばそれは、うちの歴史はこうだったし、あるいは何

人の人間がいて、どういう産業があつて、だからこういうデザインが必要だとか、あるいはこういう関係だとか、要するに知性でつかんでいる関係です。

しかし、伝統的な村社会っていうのを見ていきますと、実は知性でつかんでいる関係ではない。身体性を通して掴んできた関係っていうのがあるわけで、それは自然との関係でも、絶えず身体性を通してつかんでいて、その身体性をつかんでいる時にも中間に出てくるのは、自然と関係を持つ「技」っていうところになるわけです。つまり、秋にきのこ採りに行くにも技がいるし、私はマツタケ狩りなんて大好きですけど、あれはもう死ぬ思いでやるっていいですか、岩山をよじ登るようながらうちの村ではないところでやりますので、非常に厳しいものになります。そういうことも全部含めまして、絶えず技を通して、やはり、自然との関係を結ぶ。実は人間同士でも技を通して人々の顔の表情を読み取ってく技とか、それから、ここではこんなふうにおさめておいたほうが良いのかとかですね。実はそういうものも知性ではなくて技なわけで、その技を使っていく、その技を通しながら、実はその身体を通した関係っていうのは出来あがっていくんです。

さらにもう一つ、レデュメでは「靈性」っていう言葉を使ってるんですけど、これは、鈴木大拙による日本的靈性という有名な言葉ではありますが、その使っている言葉を利用して、実は、靈魂が存在するかどうかっていう話ではなくて、知性で掴むこともできないし、身体性で掴むこともできないけど、人間の奥にある生命そのもので掴みとるみたいな、そういうふうな能力ですね。それを指して彼は靈性と呼んでるし、だから僕はイコール生命性とも書いていますが、何かそういうものを通してできていく関係っていうものがあります。だから生き物同士の関係っていうふうにも言っても良いかもしれませんが、多分その知性、身体性、靈性あるいは生命性という、そういう中で全体的な関係が結ばれていて、その全体的な関係がいわばデザインの主体となる感じですよ。それに従って人間たちは日々生きています。そこには自然と一つの社会デザインが出来あがっているという。それがあのかつての民衆たちの姿だったんじゃないかなと。

それで、この有り様みたいなものから、どういうふうにつかんでいけばいいか。自然と人間の関係っていうのを見た場合でも、実は一筋縄ではいかないんですよ。

今僕も 150 坪ぐらいの農業という仕事をずっとやっているんですけども、今年はもうほとんど収穫率がゼロなんです。それは、山間地農業っていうのはどこでもそうなんですけど、動物被害をどう止めるか、それが一番大きな問題になってきて。僕のところはちょっと不十分だったので、イノシシと猿とシカとハクビジンにやられまして、ついに何もなくなつたっていう、そういう現実です。こうなりますと、ある種の動物たちは害獣という扱いを受けることになります。

しかし、村に暮らしてる人間たちにとってみると動物っていうのは、むら、村のまさに自治をしている仲間なわけです。私さっき言ったように村は自然と人間の世界であると、人間だけが一方的に威張っちゃいけないわけですから。だから、自然の生き物はすべて村の人間と同格の仲間っていうわけです。仲間であり、だけど現実には害獣です。しかし、

今は11月15日から、うちのほうは狩猟が解禁されます。2月いっぱいまで鉄砲打ってもいいという時期があります。ですから、動物たちは今、猟師さんたちに追われている時期でもあります。

子どもは多分昔から言ってきたことです。それは人々の考えからすると例えば動物たちは例えば草を食べる、木の実を食べる、あるいは小動物をとる、そういうこう、連環の中で生きてきた。であるならば人間もまた動物をとったり木の実を採ったりして生きていく。それは許されるわけです。そういう思いがあって、ここでは、冬場だけはそうなる。

ただし、ルールもあるわけで、とった以上はすべて利用しきらなければいけないという、間違ってもそれをゴミ扱いをするようなことをしたら、天罰があたるという、それがルールなんですけど。そういうのも昔から行ってきた。

しかし、ある種の動物っていうのは神様のお使いだったわけです。そういう扱いを受けてきた。実に、動物の本体は何かって言った場合に多様なものを見てきたわけです。さき、仲間だし害獣だし神様のお使いだし、狩猟の対象だしですね。そういうふうなそのすべてが、おのずからのままに地域にある。だからその点では真理が多様であるし、多層的である。その時にただ今どういうふうな対応をしたらいいのかっていうことだけが絶えず折り合いの付け方として重要になってくる。

その折り合いの付け方というのものも、生きている人間たちの知性で一方的に決めたらいけない。つまりその中自身にまた多様な関係が入って来る。ただ自然との関係も入るし、それから死者たちの関係も入るし、歴史との関係も入る。そうやって生みだされていった地域文化との関係も入って来る。そういうこう、すべてのものとの関係を結びながら考えていく。

そこに、ある意味での、まさに自然から見た社会デザインみたいなものが、可能であった時代の有り様っていうものがあったといたしますか。であるとするならば、社会デザインっていうのは極めてこれもまたローカルなものでなければいけないわけで、その土地に立脚をした社会デザイン。ここにはデザイナーもいないし、ある意味クライアントもいない。あるいは生産者もいないし消費者もいない。すべてがその関係の中のどこかにつながっている。そのことによって、みんながごく勝手なことをやりながらも、絶えずそこに自分たちの社会を見つめていくための祭りがあったり、年中行事があったり、そしてまた、景観としてデザインがあったりしながら、一つのトータルなデザイン的世界を作っていた。つまり、この辺りから、何を私たちがもういっぺん学び直しながら、これから何を考えていったらちゃんとした社会デザインが可能なのかということ、見つけ出していくのも一つの課題ではないかというふうに思っています。

ちょっと5分ぐらい長くなりましたけども、これで取りあえず終わります。

3. パネルディスカッション : 14:30~17:00

コーディネーター：宮崎 正浩（跡見学園女子大学教授）

パネリスト：内山 節（立教大学教授）

村上 千里（認定 NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進
会議 ESD-J 理事）

甲斐 徹郎（(株) チームネット 代表取締役）（代理：清水）

吉村 英子（跡見学園女子大学教授）

宮崎 それでは、時間になりましたのでパネスディスカッションを開始したいと思います。
これからプレゼンテーションをお願いするのは、村上千里さんです。先ほどご紹介したよ
うに、「持続可能な開発のための教育 10 年推進会議」の理事と事務局長をされています。

略歴を紹介しますと、1992 年に社会問題に直接かかわる仕事をしたいということで、外
資系のコンピューター会社から、環境 NGO に転職されて以来、さまざまな活動をされて
いますけれども、2002 年から今の推進運動に参加され、翌年この推進組織を立ち上げて現
在に至っているということです。

では、じゃ、村上さん、よろしくをお願いします。（拍手）

3.1 村上 千里氏（認定 NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議 ESD-J 理事）

地球と地域の未来をつくる持続可能な開発のための教育

村上 こんにちは。ただいまご紹介いただきました、村上千里と申します。大学を卒業し
てから、コンピューター会社に勤め、4 年半ぐらいで転職して、いわゆる環境 NGO という
ところで活動をし始めたという経歴をご紹介いただきました。このとおり研究者と
して活動した経験がなく、きょうお話しさせていただくのは、研究の成果というよりは、
私が、今取り組んでいる「持続可能な開発のための教育」という運動や考え方をご紹介さ
せていただきながら、きょうのテーマであります「自然と共生する社会デザイン」という
ことに ESD というのがどうつながっていくのかというのを、パネラーの先生方と一緒に考
えさせていただければというふうに思っております。どうぞよろしく願いいたします。

まず、「持続可能な開発のための教育」という言葉ですけれども、初めて聞かれたという
方はどれぐらいいらっしゃいますか。はい、ありがとうございます。8 割ぐらいの方は聞
いたことがおありだということだと思いますが、なかなか一般には知られていない言葉で
はないのかというふうに感じています。

私たちは Education for Sustainable Development の頭文字を取りまして ESD というふ
うに略しています。最初、自己紹介を兼ねて ESD の背景をご紹介させていただきたいと思

います。

この ESD をネットワーク組織を作って取り組むテーマとしようとしたきっかけは、2002 年のヨハネスブルグサミットです。ご存じのとおり 1992 年の地球サミットから 10 年たって、どうして世界は持続可能な社会に舵（かじ）を切れなかつたのかということ問い直し、これから先何に力を入れていくべきかということ、検討する首脳会議が開催されました。

そこで、日本の NGO から持続可能な社会を作るためには、それを担う人をもっと育てることに力をかけることが必要だろうという考えのもと、「持続可能な開発のための教育の 10 年」というのを、国連で進めていきましょうという提案を NGO から発案して、政府と一緒に共同提案したという経緯があります。

きょうの最初の北川会長のお話では、社会をデザインするのに一体アクターは誰なのかということ投げかけられたと思うんですけども、それを聞きながら ESD 的な考え方からすると、それは市民であると心の中で答えを持って、「よし！」と思いながら、今、話させていただいている次第です。

また、その後すぐに、内山先生が深いお話の中で、誰もがしなかったがそこに素晴らしい景観がある、デザインしたのは誰なのかという言葉で、さらに市民と自然と御先祖さまというアクターがそこにいることによって持続可能な地域社会を築けたんだというような話がありましたけれども、そのようなことにもつながるのではないかなと思って、今、ESD をあらためてご紹介しようと思っています。

ESD の 10 年というのが国連で進めていくということが決まり、2005 年から 2014 年までの 10 年間で国連のキャンペーンの期間としてスタートしています。今年が 2010 年なのでもう 6 年目になるんですね。折り返し地点になっているんですけども、政府が肩を入れて進めていこうとしている割には、そこまで広がりが出ていないんじゃないのかなというのが課題だと思います。

私たち ESD-J というのは、国連から依頼されてスタートしたわけではなく、逆に自分たちが提案した ESD の 10 年を、いい追い風にして環境教育であったり、開発教育であったり、貧困や環境やいろいろな社会の問題を、解決できるような人をたくさん育てていけるような、そういう教育を推し進めていくために作られたネットワーク団体です。

2003 年に発足しまして、8 年目になっているんですけども、大体 100 団体ぐらいの会員さんがいらっしゃいまして、共に環境だとか人権だとか、青少年育成だとか、それから国際協力だとか、そういうことに取り組んでいる NGO と、それから教育関係者、それから研究者の個人会員さんに支えられて活動をしています。

ネットワーク組織なので、私たちが実際に授業をすとか、講座を開くとかいうのではなく、今ある環境教育や開発教育やさまざまなオルタナティブな社会を生み出す教育が、もっともっとメインストリームに入ってくるように、主流化していけるように、社会の仕組みを作っていくことを目指して、政策提言や情報提供やネットワークづくりに取り組んでいます。

「持続可能な開発」という言葉が、なかなか日本の中では馴染（なじ）み難い言葉なのですが、特に開発という言葉は、山を切り開いてダムを作るとか、ゴルフ場を作るとか、そういうイメージがどうしてもつきまどってしまうんですけど、そうではなくて社会を作るという意味合いでこれは使っています。将来世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような開発ということで、環境を保全するだけではなく、今、貧困や紛争等で苦しんでいる途上国の人々の社会生活のレベルをより文化的なレベルにちゃんと満たしていけるような社会づくりをしていきたいと思いますというコンセプトです。

そういう社会というのを、ほかの言葉で言い表せることとしては、自然環境との共生、社会的公正、それから経済的發展という3本柱がバランスよく行われる社会が重要であるということではあるのですが、これまで社会開発というのが、経済の効率ですとか成長というのを非常に重視していた中で、環境や人々の暮らしがしわ寄せを受けているというような状況があり、それをどうバランスのいいものに組み替えていくか、が課題です。そしてそれを担うのが人々であり、私たち一人ひとりなのです。

私たち一人ひとりが、社会に参画する力をどうやってはぐくんでいくのかというのが非常に重要で、そこに教育とか市民参加ということが大切になってくる。そこをどう支えていくかということがESDの目指すところだと考えています。

とはいえ、環境と経済と社会が両立する社会というふうな言い方がされるのですけれども、じゃ、本当にそれが3本柱なのかというと、そこで書いたように、私たちの暮らしというのは、そもそもは自然とか、今年のキーワードでいくと生物多様性とかエコシステムとか、そういう自然界の大きな仕組みの上に成り立っていて、そこからさまざまな恩恵を受けたり、また、被害を最小限にするために働きかけをしながら、暮らしというものが作られてきて、生業というのがそこに生まれて、お互い人間同士が助け合いながら、相互扶助みたいな社会の仕組みができて、その上に文化や産業が発展してきたというような経緯があると思うんです。

ここの自然のキャパシティの上に、私たちの暮らしが成り立っていたということが、経済や産業のグローバル化であったり、工業化であったり大きな流れの中で、どんどんと自然とのつながりというのが見えづらくなっています。ここをもう一度しっかり取り返すというか、つなぎ直すというのが、これからの人づくりというか、これからの教育の中でとても重要ではないかと思います。

環境教育でも、人と自然との関係、人と人との関係、人と社会の関係、この三つをつなぎ直すということが大切であるといわれているんですけども、まさにそういうところで、今回のテーマに引き戻すと自然のキャパシティの中で、私たちが暮らしてきた知恵だとか、それから蓄積されてきた技術だとか、そういったものをもう一度、どう未来の人たちに生かしていけるのかということが大切でないかというふうに考えています。

よくESDを紹介する時にこういう考えをするのですけれども、例えば、身近で買って

るコンビニなどの弁当などを見ても、こういう食べ物からいろいろな世界とのつながりというのが見えてきます。

持続不可能な社会というのが、今、現在あって、地球温暖化だったり、森林の減少であったり、砂漠化が広がっていったりする環境問題もあれば、紛争や貧困で命を落とす子どもたちがまだまだたくさんいるという状況があります。

それと、また世界の状況と、私たちのこの日々食べているお弁当が深くつながっているというようなことを、みんなでこういうウェブというものを書き出して、お互いにどんなつながりがあるのかというのを、調べたりするようなこともしています。

例えば、エビフライなどでも、エビの養殖がアジアのマングローブ林をどれだけ切り開いて環境に負荷を与えているのかとか、例えば揚げ油にしてもパームオイルを取るためにどれだけの熱帯林が切り開かれて、どんな規模で生産されているのかとか、私たち本当に知らないわけですね。

そういったことを知ると、じゃ、どうしたらいいのかっていうのが考えられるようになります。昔は内山先生がおっしゃっていたように、地域の中で自然を見ながら活用しその中で生きて、技術も知識もそこで培われてきたものが、どんどん切り離されて、遠くなってしまうと、大規模になって、どんどん進んでいる中で、じゃ、もう1回どういう経済や、どういう社会の仕組みに戻していく、もしくは新しいものを作っていけばいいかという時に、今、どうつながっていて、そこで何が起きているかということも、見つめ直すということが、スタート時点として大切だろうというふうに考えています。

世界で起きていることを知るという授業などがたくさんされているのですが、それがどう自分たちの暮らしや自分たちの仕事とつながっているのかということも、もう一度気づいて、つながりを作り直していくということが、新しい社会をデザインすることなのかなというふうに考えております。

ESD で目指すのは、そういう社会を作り直すデザイナーになれる、みんな一人ひとりが社会を作る時に参画する力をはぐくんでいくということも、私は教育だというふうに考えています。

そういうような位置づけのESDという教育の考え方なんですけれども、環境教育というのとほぼ一緒じゃないかというようなご意見もありまして、どこが違うんだというような質問を受けることもあります。持続可能という概念は、環境だけではなく、もちろん環境を解決するためにも、貧困を同時に解決しなければいけないとか、世界の格差を小さくしていかなければいけないとか、そういうカバーすべきテーマの範囲がちょっと広がったというようなとらえ方もできると思うんです。

それは逆に、国際に関する開発教育という、その分野の人たちからも同じような質疑がされていて、環境というのはすでに国際機関の中では当然入ってくる視点であるというような考え方もあるとあって、ESD 自体はそういう意味では、実際に取り組みが行われている教育活動は、今、行われている活動とほぼイコールというか、ただ、みんなそれぞれの切り

口からアプローチしているのだけれども、その行き先が持続可能な社会を描くというところにつながっているという意味で、みな同じ教育に取り組んでいるという、大きな概念だと思っていただければいいかなというふうに思っています。

ただ、国連から出てきた概念だということもあって、どこか遠い世界の大変な出来事をテーマにした教育活動と思われがちなのですが、そうじゃなくて社会に参画する力というのは、日々、自分たちの足元から、自分たちの地域社会にどうかかわっていけるか、というところから学ぶことが多いのではないかと考えています。とりわけ、その自然と共生する社会を作っていくという意味では、自分が暮らしているところの自然とか暮らしとか歴史とか、そういったことにどう日々接するとか、どうそれを題材に日々人々が話し合いの場を作れるか、ということが大切なんだろうなというふうに思っています。

ESD-J では、今年 COP10 があったということもあって、生物多様性と ESD というのがどんな接点をもてるかということ 키워ワードに、去年から調査事業というかプロジェクトを始めまして、地域の中で自然を大切にしたい地域づくりに成功しているところでは、どんな活動が行われていて、そこにどんな学びの場があるんだろうかということ調査して、簡単なパンフレットにまとめたものが、今日こちらでお配りしているものです。

その中で紹介している一つが、鹿児島湾ですけれども、鹿児島湾の奥のところに重富干潟というのがあって、そこでの事例をご紹介したいと思います。素晴らしい景色です。桜島まで歩いて行けるのではないかとと思うぐらいすてきな写真なんですけど、実はカルデラ湖の一部が抜けて、それでU字型にないなってこういう湾になっているという、そういう地形らしいです。なので、歩いて行けません。こんな素晴らしい干潟をなんと埋め立てて浄水場を作り、レジャーランドを作るという話が 15 年ぐらい前にあったそうです。

地域の人たちは、やっと水洗トイレがくるというので、すごく喜んであまり議論されずにそのまま通ってしまいそうだったのを、その大切さを知ってもらい、その開発を何とかしたいと思っていた人たちが、浄水場を入れることによってメリットもあるけれども、水洗トイレを作るには自己負担がかかるんだよということをちゃんと知ってもらったり、そういう地域の人たちにこの干潟を体験してもらって生物調査をしたりもしくは干潟遊びのようなことをしながら、この干潟の素晴らしさを感じてもらったり、もしくは、そこから採れた貝などをみんなで食べながら干潟のもつ浄化作用の勉強会を行ったりしました。そういうことをして結局、浄化施設、レジャーランドを作るよりも、この干潟を干潟のままにしておいたほうが、私たちは幸せだよっていうのを、地域の中で話し合いができて、なんと議会にその声を反映して開発が止まったという、そういう干潟なんです。

そういうふうにして議論を経て守った干潟にもかかわらず、その数年後は不法投棄の自転車だとかごみだとか散乱する、本当にあまりきれいなじゃない干潟になってしまい、人が来ないとやっぱり治安も悪くなって、バイクなどで夜中にお兄ちゃんたちがやって来るような場所になってしまいました。周りの近所の人たちは、そこってすてきな場所だったのにねっていう、過去形で語るような干潟にまた戻ってしまった。

だけれども、じゃ、それをもう1回地域の人たちの宝物と思えるような、昔の干潟を取り戻そうというので、NPOがそこに入って、まずは最初にやったことは、ごみをみんなで集め、毎日ごみを回収する活動を続け、だんだんそれに地域の子どもたちが参加するようになって、子どもたちが参加してくると今度は大人たちが参加するようになりました。

干潟がきれいになってくると、今度、散歩する近所のおじさんおばさんが増えてくるようになって、そこで、「こんにちは」という会話が出てきて、昔はこうだったんだよとかいう話ができて、というような地域の人々が集まれ場にまただんだん戻っていくというようなお話を聞きました。

今は、その地域にある建築の専門学校が、この干潟を題材に何か私たちにできることはないかということを相談に来て、測定の技術を使って干潟の地形を専門学校の学生たちが調べて、この干潟の変遷とかをちゃんと記録していけるような仕組みが作られました。イベントで地域の人たちと一緒に、漁を職にする人たちもこのクリーンアップに参加をして、干潟を守るアクションにかかわったりし、地域作りの拠点になっています。そこまでかわることが日常的に生まれてくると、多分、ここにはもうレジャー施設を造ろうというような話が出てこないだろうというふうに思います。

そういう身近にある自然がとても遠くになってしまったのを、もう1回近くに引き戻すような取り組みが、教育ということではなく、そうじゃない日常の中でのかわりをどう作っていくかというところが、ヒントかなというふうに思っています。

全部をご紹介していると時間がないので、あとはこのパンフレットをご覧くださいければと思います。地域の人たちが自分たちの住んでいるところの自然だとか、その自然をまず利用して生きてきた昔の知恵だとか、そういったことをしっかり知る場としてイベントを行ったり調査を行ったりというようなことが、その一つの形としてあるのではないかなと思います。

そういういろいろな人たちとの交流の中で、この地域の自然をどう生かしながら、どういう社会にしていくか、どんな町にしていきたいかというようなことを、いろいろな人たちが語り合っていく場というのをどう作っていくかということが、大人にとってのESDなのかなというふうに考えています。

これは、国際実施計画というESDを進める上でUNESCO作った実施計画の中にもいわれていることですが、ESDは子供たちだけのためのものだけではなく、今、社会を作っている大人自身が学びながら、今の社会をどう変えていくかということであるというふうにいわれています。先ほどご紹介したような、日々の自分たちの暮らしをどうするかというところで、ESD的な活動というのがたくさんあるのではないかなというふうに思っていて、そういうものがもっともっと広まっていくことが、自然と共生する社会というのが広まっていくことにつながるのではないかなというふうに思っています。ということで、拙(つたな)い紹介ではありますが、私からのESDのご紹介をさせていただきました。ありがとうございました。(拍手)

宮崎 はい、どうもありがとうございました。私どもの大学も環境教育は持続可能性教育というふうに、考え方を少し視点を変えて考えなくてはいけないなというに、私も思いました。では、本当にありがとうございました。

3.2 甲斐 徹郎氏（(株) チームネット 代表取締役）（代理、清水氏）

櫻ハウス

宮崎 それでは、次は、今回は欠席になりました甲斐さんが用意されたビデオとパワーポイントを使って、代理の清水さんにご説明していただきます。それでは清水さん、よろしくお願いたします。

清水 株式会社チームネットの清水と申します。本日は、甲斐に代わりましてプレゼンテーションをさせていただきますので、よろしくお願いたします。

このたびは、弊社代表の甲斐が都合により、パネルディスカッションに参加できなくなりましたことを深くおわび申し上げます。諸先輩の皆さま方と深く交わることのできる貴重な機会だったんですが、欠席ということで甲斐自身も大変残念な思いしております。

本人不在で誠に失礼申し上げますが、今回のテーマに則した簡単なプレゼンテーションをご用意させていただきました。皆さまの議論の題材として、少しなりともお役に立つことができれば幸いです。

まず、最初に甲斐がプロデュースし、2003年に完成した「櫻（けやき）ハウス」のビデオをご覧ください。都市部において自然との共生をテーマにして実現させた15世帯の小さな集合住宅となっております。

*** 00:26:24～00:31:06 ビデオ映写***

昨年世田谷区に誕生した櫻ハウス。230坪あまりの敷地に15世帯が暮らしています。多くの緑を残した広大な敷地。実は、江戸時代より続く屋敷林だったのです。

こちらが地主の鈴木誠夫さん。昭和16年、この地で生まれた鈴木さん。子どものころは屋敷の中に広がる自然が遊び相手でした。そんな少年の元気な姿を、この大きなケヤキの木がいつも側から温かく見守ってきたのです。

それからおよそ半世紀、親の他界で鈴木さんは巨額の相続税の支払いを迫られます。窮地に立たされた鈴木さんの心の中に生まれた熱い思いは、土地は売ってもこのケヤキだけは残したい。

鈴木さんが選んだ道は共同住宅を建てて住んでもらうという方法。その思いに賛同する

人を募りました。その結果、15組の家族が手を挙げ、プロジェクトが始まります。

そして、2002年3月、プロジェクトはケヤキの移植から始まりました。新しく誕生する共同住宅のシンボルにしたい。みんなの意見は一致したのです。不安を胸に見守る鈴木さん。樹齢250年、重さ23トンのケヤキの移植は成功しました。

そして、昨年9月ついに檜ハウスが完成。周囲の自然を残した上、住民たちの提案により、環境を高めるさまざまな工夫が取り入れられました。建物全体をおおう植物、井戸水や雨水などを利用して作られた池は、自然の生態系が再現されています。屋上には土を入れ菜園に。

そして何よりも人々の心をいやしてくれるケヤキの木。それぞれのお宅が、それぞれ自由にコーディネートしているという檜ハウス。その中をちょっとのぞかせていただきますよう。

こんにちは。どうも、どうも、いらっしやい、こっちから入ってください。

リビングが広い窓が玄関がわりになっている加藤さんのお宅。大きなワンルームで作られています。周囲の環境に合わせて、調度品もすべて木目調です。

どうやら木の香りは、子どもたちの笑顔を作るみたいですね。

大きなケヤキが、ビルでいうところのクーリングタワーなんですね。水を含んだ葉っぱに風を通してあげれば涼しい。

夜も、窓を開けて寝ればぜんぜんエアコンなしで涼しく過ごせます。

住民のみんなが集まる場所は、鈴木さんが長年過ごした母屋なんです。ここに暮らす人たちが、まるで家族のように集まってきました。

おーい。ジュースもらった。

どこか懐かしい風景。笑い声に人が集まる。昔の日本ってこんな感じでしたよね。鈴木さんも気持ちよさそうにほろ酔い気分。

やっぱりね、一緒に生きさせてもらってね、むこうもね、嬉しがっていると思うね、ケヤキだって。

そのケヤキの木は、楽しそうなみんなの会話をいつまでも笑顔で見守っていました。

清水 ビデオでご覧いただきました、「檜ハウス」の計画手法について、ご紹介したいと思えます。「檜ハウス」で最も重視したことは、コミュニティを生かすことで、個人単位では決して得ることのできない、ぜいたくな「心地よさ」を実現させるということでした。

そのポイントは、コミュニティの手段化です。「檜ハウス」の中庭に残された樹木の環境は、個々の室内を快適にする空調装置として機能しています。そして快適さをもたらす環境を共有し合っているという関係が、豊かなコミュニティを醸成するのです。

先ほどの内山先生のお話を伺って、「関係がデザインする」ということは、まさにこのことだなあというふうに感じたのですが、当初、手段としての位置づけだったコミュニティが、生活の本質に変容するということが起きています。

「快適さ」を単に「スペック」だけによって作りだす現在の住まいづくりの手法は、都市の物質化を招いているのだと思います。「樗ハウス」のような、他者との「関係」を生かして「快適性」を追求する。その繰り返しが豊かな都市環境の創造と、コミュニティの再生につながるのではないかと思います。

短いプレゼンテーションで、説明不足の点もあるかと思いますが、配布資料もございましたので、是非一覧いただけたらと思います。ご静聴ありがとうございました。(拍手)

宮崎 どうもありがとうございました。本人が来られなくて残念ですが、プレゼンテーションで使っていた資料やパワーポイントも、住民の方の顔写真が入っているので、申し訳ありませんが配布できませんということが、本人から連絡がありましたので、ご紹介させていただきます。

3.3 吉村 英子氏（跡見学園女子大学教授）

自然と共生する社会デザイン—これからのモノづくりと暮らし—

宮崎 それでは次に、吉村英子先生にお願いいたします。跡見学園女子大学マネジメント学部教授で、医師でもございます。岩手医科大学医学部大学院を修了、内科医、公衆衛生医として勤務、その後、厚生労働省、文部科学省を経て、2005年から現職です。

専門分野は健康科学、公衆衛生、環境保健ということです。では、よろしくお願いたします。

吉村 ご紹介ありがとうございます。吉村と申します。もともとは医学部出身です。プロフィールを紹介させていただきますと、ちょうど私が医学部を出た当時、1980年頃は、結核の罹患率、死亡率が順調に減少してきた頃でして、次は、B型肝炎が国民病になるといわれておりました。B型肝炎というのはウイルス感染症で、健康保菌者が多く、この感染経路は主に保菌者のお母さんから子どもに移るもので、この健康保菌者のうち当時3~5%が肝炎から肝硬変、肝がんに進むとされておりました。ですから、この母子感染を防ぐことが課題で、その予防の方法について研究していたのが後に厚生労働省で働くことになり、そのままずっと役人をやっておりました。

2005年に跡見学園女子大学に着任、私が跡見学園女子大学に来て今までの経験を生かしながら何をテーマに研究しようかと思っていた時に、たまたまアメリカのミシガン州にある、グランドラピッツという町に知人がおまして、アメリカで初めてのサステイナブルビジネス学部というものを新設するんだというような話がありまして、生活環境マネジメント学科なら是非一緒にやろうよというような話がありまして、それがきっかけでサステイナブルビジネスの研究をしています。

きょう、ご紹介いたします「これからのものづくり-サステイナブルビジネス-」は、今、世界中で注目されております所謂「サステイナブルビジネス」の考え方の一つ、Cradle to Cradle という考え方をご紹介させていただきます。

これは物のライフサイクルを循環させる「ゆりかごからゆりかごへ」という考え方で、イギリスの社会福祉の理念、from the cradle to the grave をもじって naming したもので、物を作ったらそれは捨ててはいけない、有限な地球資源は循環させて何度でも使わなければ地球は枯れてしまって人間が住めなくなる、これからのモノづくりは、ごみを出さない物づくりに転換しなければいけないという考え方で、このような物づくりを普及させるためにはどのようにしたら良いかということでございます。

これを推し進めますと、やはりこれからの人間の暮らし方というのは、物を作って捨てるだけではなくて、やはりそれからもう一度再生しながら使い直す。そういった企業活動は今までのように自分だけ利益を上げればよいというのではなく、企業が育ちながらその企業がある地域との共生も考える、それから先ほど貧困の話もありましたけれども、そういった福祉面も、ノーマライゼーションも考えながら地域との共生、地球環境との共生、

表1、世界中で取り組む地球環境問題

1972	・成長の限界;ローマクラブ
1973	・Small is Beautiful;E.F.シューマッハ
1987	・「持続可能な開発」、国連、ブルトラント委員会報告書
1992	・「環境と開発に関する国際会議(リオ宣言)」、国連、リオデジャネイロ

そして企業の利潤との共生、この三つのバランスを取りながら、これからの企業は進んでいかなければいけないというような考え方です。この考え方は、ちょうど、このころからわが国でもだいぶ注目されるようになった CSR、企業の社会的責任と一致するものですから、生活環境マネジメント学科は文科系の学科でございまして物は作りませんが、消費者教育の中で、企業だけがそういった

物づくりに頑張るのではなく、そういった物づくりする企業を育てるような消費者を教育していくのが、私の仕事ではないかということで、消費者教育の観点から「これからのモノづくりと暮らし」についてご紹介させていただきます。

環境に携わった先生方にはそんなに新しい考え方ではないかもしれませんが、日ごろ、私が学生に教えている内容をご紹介させていただくと意味で聞いていただければいいと思います。

現在、地球温暖化、気候変動、資源エネルギーの枯渇、それから生物多様性の急激な劣化、食料や水の配分の問題とか、増加する人口問題、といった所謂地球環境問題が一向に改善されません。

そもそもこの地球環境問題、何とかせねばと言いつつ出たのはいつごろかと言いますと、1972年の「成長の限界」の出版に始まります。これは、イタリアのローマクラブが、ドネラメドゥズ始め MIT の研究者に、最先端の大型コンピューターを使いまして、当時の地球資源の使い方、人口の増加、経済活動がこのまま続いたらどうなるかをシミュレーションさせ、その結果を「成長の限界」として出版しました。100年以内に資源は枯渇し、人類の発展に

限界が来ることの警鐘を鳴らしたのです。世界中が騒然とします。

その、すぐ翌年には、シューマッハーの『スモール・イズ・ビューティフル』が発刊されます。仏教経済学という当時としては、何か新しい考え方らしくて、ちょっと私はそちらの方は疎いので詳しくはごさいませんが、科学技術というものは、産業革命によってもたらされた「より速く、より多く」の大量生産ではなく、人々が必要とする量を必要な時に生産する人間の背丈に合わせた方向に進むべきで、人間は小さいものである。よって「スモール・イズ・ビューティフル」を提起し、当時の産業の在り方に警鐘を鳴らしました。

その後、世界中が騒然となりまして、それまでは大きくすればいいと、大量生産すればいい、大量消費すればいい、あとは捨てるでも地球が何とか処理してくれるだろうと、そのようなことで成長してきた産業だったのですが、ローマクラブのその「成長の限界」のシミュレーション、あれはうそだとか、いや、やっぱり本当だとか議論が始まります。同時に環境問題を考える NGO が続々作られたといわれております。

そんなことから世界中の騒ぎを沈静化、あるいは何かしら方向を出さなければいけないということで 1987 年、それまで発展、発展と進んできた産業活動に対し、国連のブルント

表 2 「成長の限界」の主な警鐘

- 天然資源の枯渇
- 環境の悪化、地球の温暖化
- 急速な人口増加
- 広範に及ぶ食糧危機と栄養不足
- 経済格差→貧困問題

地球の物理的な限界の範囲内に治めながら、人々が満たされるような経済の在り方の確保が必要→解決のための数通りのシミュレーションを提示

ラント委員会は「Our Common Future」という報告書を出し、その中に「Sustainable Development」すなわち「持続可能な発展(開発)」という地球資源の限界を意識した「持続可能」という言葉が使われるようになったといわれております。

その後 1992 年に、リオデジャネイロで開かれた、いわゆる「環境と開発に関するリオデジャネイロ宣言」(リオ宣言)が提起され、この宣言を行動に

移すための「アジェンダ 21」や、「気候変動枠組条約」や「生物多様性条約」が提起され、地球環境問題に対し世界中で対応していこう、みんなで取り組んでいこうということになった。以後、2002 年にヨハネスブルグで「持続可能な開発に関する世界首脳会議」が開かれ、これらを地球サミットと呼ばれるようになりました。

先ほど、ご紹介した「成長の限界」ですが、時間の関係があるので詳細は割愛しますが、いわゆる結論としては、無尽蔵と思われていた地球資源は有限で、今後、地球の発展には限界がくる、それまで私たちは、地球というのは無限大の資源を利用してどんどん発展していけばいいんだと思われていたんですが、その時に初めて地球の限界を考えなくてはならなくなったわけです。

表 2 にありますように、この成長の限界での主な指摘は、天然資源の枯渇とか、環境の悪化、地球の温暖化、地球の人口増加、それから広範に及ぶ食料不足、栄養不足、こういったようなことに警鐘が鳴らされたわけでごさいます。

この時、現在問題になっております経済格差や、貧困問題についても言及されております。この時に 10 通りくらいのシミュレーションがなされているんですが、この後著者らは

「限界を超えて」、「成長の限界-人類の選択-」と10年ごとに当時のデータを検証しておりますが、1981年に出されたシミュレーションがほとんど修正されずに地球環境の悪化が進んでいるとしております。

表3は先ほどご紹介したブルントラント委員会の報告書「Our Common Future」の「持続可能な発展」の考え方です。今を生きる私たちは、将来の世代の事も考えて開発を進めるべきで自分たちの世代の欲求だけを満足させてはいけいない、将来の世代の要求を満たしつつ、現在の要求を満足させるような開発をしなければならないという意味です。今の経済というのは、今を生きている私たちだけの要求を満足させるための開発の仕方ではないか、果たして有限な地球資源を将来の世代にも残せるような形で開発しているだろうか、ここで立ち止まって今の産業・経済の発展の仕方を見直す必要があるのではないか、というように私は理解しております。

そもそも、こういった疑問はいつ頃から何をきっかけ始まったかということ、私なりの理解の中でお話したいと思います。これは(表2)ヘロンの蒸気機関ですが、この蒸気機関、水を温めて沸騰させ、この蒸気ので動かす、このエネルギーを動力に変えることから始まったといわれております。このとき、エネルギー源は薪から石炭に代わり、そして石油に代わっていくわけです。このメカニズムは、その後ワットが蒸気機関車を開発して、いわゆる石炭と石油、すなわち地下資源からエネルギーを得てそれまでになかった大きな動力を得、産業革命を起し、工業、産業の発展につながり、そして自然観と決別していったといわれております。

ところが、この頃日本では江戸時代、やはり非常に技術が発達したのですが、日本ではその技術は産業革命による大量生産とか大量消費には向かいませんでした。庶民の楽しみということで発達するのです。庶民を楽しませたからくり人形や何度も版を重ねて仕上げる浮世絵の技術は西欧の技術と比べても決して劣らない、近年の技術力にも匹敵するような高いレベルのものを持っていました。

わが国では、自然に問いかけながら発達したため、ヨーロッパのような自然をも征服するかのような勢いでの技術開発ではなく、日常の庶民の楽しみとして発達したようです。

表3 持続可能な発展とは

将来の世代の欲求を満たしつつ、
現在の欲求も満足させるような
開発をいう



近年の経済の発展についてお話したいと思います。今の経済の発展の仕方は、繁栄よりも格差を広げているのではないか、それは豊かな暮らしよりもむしろ不安定をもたらしているのではないか。それから、地球資源が衰退し枯渇を招いているのではないか、そしてこれからの成長が果たして今の人間の生活に対して本当に幸福をもたらすような、そんな方向で発展しているか、といったようなところに非

常に疑問が持たれるようになっていきます。

この辺で、ちょっと、自分たちの暮らし方について考え直す必要があるのではないかと、私は考えるわけです。ですが、一度得た利便性とか富というのは、なかなかこれ変えられ

ないのが人間の常でございまして、皆さん、生活を見直すというと、江戸時代に戻るのかとか、今の便利さを捨てるのか、我慢とか、質素になるのか、とそんなことを言います。そういうことではなくて、いわゆるこのパラダイムシフトの方向性としては、環境のために今の生活を変えたり、捨てるのではなくて、本当に人が幸福で楽しく豊かに暮らすためにはどうしたらいいのか、何をするのかといったような発想の転換を図っていくことです。現在のエコな生活への転換は、どちらかということ、例えば電気の消費量を減らそうと LED が開発されました。これは従来の電球や蛍光灯より格段に電気の消費量が少なくて従来以上の明るさが得られます。わが家でも LED に切り替えました。トイレとか、廊下とかですね、全部 LED に代えたんですが、エネルギー効率が7分の1になる。すると、電気の消費量が七分の一なら廊下の電気はつけっぱなしにしても良いのでは、となるのです。

そうです、人は今までで1個で済んだところを10個使っちゃうんですね。もっとあります、エアコン、これもエコ商品化しまして非常に効率が良くなったと。そうすると、5部屋あったとする、今まで一部屋にしか付けていなかったエアコンですが、各部屋につけくなる。そうしたら結果としてエネルギーの消費量は全然変わらないんです。

去年は IPCC から信頼できる科学論文、何万何千という論文を検証して出された報告書を見ますと、地球の温暖化は進んでいると言う結論が出されました。この報告書はノーベル賞をもらっています。

近年ピークオイルという、いわゆる地球上にある石油生産量がピークを迎えその後はどんどん減ってゆくという時期が問題になって、いろいろな予測がされています。多くは2030年といわれています。2030年を過ぎるといって、地球の貯蔵された石油がどんどん減ってゆくわけです。それは困る、石油が無くなったら多くの産業は立ち行かなくなる、ではどうしたら良いのか、これがこれからの暮らし方のパラダイムシフトです。

バックキャストイング、その時を避けるために、今、何をしたらいいかという発想で物事を考えたら、今どうしたらよいかと考えて行動するのがこれからの暮らし方です。

実は、一度手にしたら利便性はなかなか手放すことはできない、でも地球の資源はどんどん減って今までの生活は維持できない、わかっているけれども実行が伴わない、これをですね、エコジレンマと呼んでいます。環境に対して何かやらなければいけないと思うんだけど、今、何もできない。それは恐らく、今、生きているのは自分であって、未来に生きている人は、いいよと、未来の人が考えたらいいんだよといったような、利己的な考え方なのかもしれませんが。

環境のために、何かをやめるということではなくて、幸福のために何をしたらいいかという発想の転換をしたら、このジレンマが少し緩和されるのではないかなと考えます。

フォアキャストイングといいますか、今までの延長線上の中で改革を考えるのではなくて、いわゆるピークオイルとか、地球温暖化については、この点を超えると急激に地球は温暖化して元には戻れなくなるというティッピングポイントがもうすぐ目の前に来ている。近い未来に必ず限界が来る。じゃ、その限界の地点から逆算して、だったら私たちは、

今、どのような生活をしたらよいのか科学的に検討してみようと。行政とか政府とかそういう問題もありますけれども、ここは研究者が頑張ってますね、この辺が科学的で信頼できる、そういう予測を今こそきちんと出すべきであるのではないかなと、そういったことも考えています。

差し迫った近い将来に向けて、今、何をすべきかというバックキャスティングという考え方、これはこれから必要なのではないかなと思っております。

当然のことながら、国のほうでもですね、2000年に循環型社会の構築ということで「循環型社会形成推進基本法」というものを制定しました。

その時は、3R、Reduce（リデュース）、Reuse（リユース）、Recycle（リサイクル）とあって、無駄を減らして、使える物は何度でも使い、再生できるものは再生して、どうしても循環利用できないものだけを廃棄物として適正処分する、こういうことを基本とした循環型社会形成推進基本法というものが制定されております。これも、先ほどちょっとご紹介しましたように、実は、Cradle to Cradle という考え方と共通するところがあるのです。

今、私が、これからの暮らし方は、こういうようにしたほうがいいのではないかとことを三つ、ご紹介させていただきます。

一つは、バイオミミクリーとあって、バイオというのは生態系、ミミクリーというのは生態系をまねるという造語がございますが、これは1997年に生物評論家であるジャンニエ・ベニユスが『バイオミミクリー』という本を出して、世界的に注目を集めています。

およそ48億年前に誕生した地球、現在の肥沃な豊かな安定した生態系が完成されるまでには、隕石（いんせき）がおっこってきたり、氷河期があつたり、いろいろな環境の変化があり、紆余（うよ）曲折があつて今日になっている。今の生態系というのは、それまでの地球のいろいろな試行錯誤の中から、効率良く合理的にいわゆる生き残って、いろいろな関係性がうまく残って、偶然性もあるんですが、そうしてできたものであるんで、その生態系の仕組みを知ることは、きっとこれから人間が生きていく方向性、これを示唆してくれるのではないかとといったようなことで、ここでその生態系の何億年の長い間に培った生態系の仕組みに目を向け、そこから人がこれから生き残る術を学ぼうではないか、これがバイオミミクリーというものの考え方です。

次が、ネイチャーテクノロジーです。これは、東北大学の石田先生が、日本発の、私から言うとバイオミミクリーですが、いわゆる生態系をまねた物づくりや暮らし方というのは、日本人がよく知っているのか、江戸時代から、先ほど内山先生のお話にもあつたんですが、日本人というのは自然に耳を傾けながら暮らしてきいる。

西洋人というのは、耳を傾けなかったからこういう危機に至っている。したがって、日本発の生態系に学んだ、そして工学とか高速技術、それから、そういったようなものを全部合わせた、いわゆる発想の転換をして、バックキャスティングという考え方を言い出したのは石田先生なんですが、いわゆる日本発の物づくりと暮らし方、これを発信していこ

うということをやったものです。

それから先ほど私が、すべて、いわゆるごみを出さない物づくりということ考えた **Cradle to Cradle** という考え方です。これを考えたビル・マクダナーは、幼少期、5歳の時、実は、日本で暮らしておりまして、朝起きると豆腐屋さんの笛で起きて、それでかい巻きを着た温かさ、それから土塀とか、いわゆる日本の生活のほとんどが、生態系に物の循環によく沿った暮らし方をしているということで、こういったような考え方を提唱しています。

先ほど、私、これを訳しまして、あらためてこれはバイオミミクリーだなと思ったんですが、非常にこれからの暮らし方を示唆していると思います。そのバイオミミクリーなんですが、ベニユスは、九つの生態系の法則ということ提言しております。これは非常に、人の暮らし方に共通するのではないかと、生態系の法則だけではないんじゃないかということで、私なりに下手な訳ですが、訳しております。

1. **Nature round the sun** で、自然は太陽のエネルギーで活動をする。
2. それから、日本語だけで紹介しますと、自然は必要とするエネルギーしか使わない。
3. それから自然は、その機能の形態を調和させる。
4. それから自然はあらゆるものをリサイクルし、ごみを出さない。
5. そして自然は相互に協力するものに報い、助け合っている。
6. それから、自然は多様性に投資する。
7. 自然は自らが置かれた環境に適応すべきエキスパートである。
8. それから、自然は自ら過剰を抑制する。
9. 自然は極限でその限界を調整する。

最後はいいですね。これが今、人に課せられた課題のように気がしますが。

そういったような自然の摂理、九つの法則と言っておりますが、こういった生態系の特徴一つ一つを見ますと、今の私たち現代に生きる人間に、非常に反省と、それからこれからの方向を示唆する、そういったようなものを示しているのではないかと思います。

これから、**Cradle to Cradle** を、ご紹介させていただきたいと思います。**Cradle to Cradle** は先ほども言いましたように、地球環境と共生し、地域社会と共生し、それから企業の利潤とも共生し、この三つのバランスを取る、特にサステナビリティというものを、実現しようというものです。

要はですね、耐久財と消費財という物の生産を二つに分けて、布とか食べ物とか、それからこういった紙、いわゆる捨ててコンポストブル、自然界に出してもいわゆる消費するものは、自然界に出しても無害で生分解性で、その土地から生まれる植物を育てるように働くもの。そういったようなものをプロダクト・オブ・コンサンプション (**product of consumption**) というものに分類します。これには絶対有害なものは、人間にとって有害な物は絶対使わないようにして、循環させる。それから、洗濯機とか、冷蔵庫とか、それからパソコンとか車といったようなもの、これはいわゆる使ってなんぼですね。洗濯機も回

して洗ってなんぼ、車も走ってなんぼ。こういったようなものをプロダクト・オブ・サービシー (product of services) と表現します。

これは人体に有害なもの、特に、乾電池のカドミニウムなどのように、どうしても使わなければいけないものがありますが、それは工業技術によって人体に絶対に接しないように隔離して使って、何度でも使い回す。有害なものを絶対に自然界に出さないで、クローズドにしてしまう。

こういうふうな製品を使い分けると、これはリデュースやリユースの概念で回って行きますし、こちらも捨てるに害にはなりませんので、そこからまた生態系のいろいろ関係性が出てきます。

こういうふうなものの作る時の理念、こういったようなものに徹底していくと、ごみが出ないのではないかというような考え方、これが Cradle to Cradle という資源循環宣言になっています。

時間があまりありませんので、この Cradle to Cradle の考え方を、実は、グランドラピッツでは町づくりにも応用しております。そしてグランドラピッツでは、この Cradle to Cradle の理念に沿った物づくりをする企業だけを誘致して、非常にアメリカの中でも環境に良い町といわれております。これが町の中ですね。

グランドラピッツの中には、点在する町の中には、こういう天然のエネルギー、太陽エネルギーを使って、こういったような植物も、ただ植えられているだけじゃなくて、レインガーデンと称しまして、その地下にいろいろな分子の違うものを装備しまして、その地下に地下水を集めるようになっていて、ここに住んでいる人たちのいわゆる生活用水になっています。

ここは農場なんですけれども、実は、混栽培ですね。トマトの隣にキュウリとか、ぐちゃぐちゃに植わっているんですが、収穫量はほとんど変わりません。農薬も最小限で済みます。こちらが取れた収穫物なんです。この土地には、跡見学園女子大では毎年ですね、ここに2週間連れて行ってですね、こう研修をしているんですね。そうしたら行く前はですね、環境なんて言っているんですが、帰ってくると家で、グリーンウォールにしたとかグリーンカーテンにしたとか、みんな行動パターンに変わって帰ってくるんです。今年も行ってきましたけれども、みんな元気で帰ってきました。

非常ににおいのあるおいしい野菜がたくさんできまして、大体、これ収穫すると帰ってから、ホテルでおナスなんかは塩だけ持って行ってですね、みんなで一夜漬けにしたりします。

ちょっとここでお見せしたいのは、後で出てくるところと共通ですが、実は、この農園でもヤギと鶏を放し飼いにしているんです。これは後で出てきます。これは、シカゴのレインガーデンですが、この下にも駐車場と地下水というふうになっていまして、シカゴも Cradle to Cradle をやっています。

実は、後で出てくるんですが、これは偶然 11 月の頭に静岡県にある「木の花ファミリー」

ということに視察に行く機会がありまして行ってきました。この木の花ファミリーでも、18年たっているんですが、実は、グランドラピッツと同じような暮らし方をしていたんですね。

富士山のふもとにあるところで、広大な農地、所有者がほとんど高齢化しているので、安い賃貸料で借り入れたということでやっているんですが、ほとんど自給自足ですね。おしょうゆも自分たちで作っているんですが、ここで取れた野菜は無農薬でありますので、近くの農家の方が取れた野菜を、先ほどご紹介したグランドラピッツと同じような形で、ある程度まとめてレシピを入れて宅配しているようなんですが。そういった同じようなことをしているんですが、やはり地球0.7個分の生活を目標にしてやっているようです。

これですね、やっぱりここで飼っているヤギだとか、そして鶏、鶏も放し飼いで飼ってイまして、地球さんありがとうということで、まったくの偶然ですがヤギと鶏がいたということで、これは木の花ファミリーでいろいろな菜園です。

ここでいただいたお昼ですが、ほとんど農薬なしで作られた野菜の中で、こういうランチで、地球0.7個分の暮らしをしております。

このように、これからの暮らし方ということで、いろいろ調べて、私が、誘われるままにいろいろ歩いていまして、最後に行き着いたところが、この最後の木の花ファミリーのような、コレクティブハウスといいますか、いわゆる共同生活、価値観とか意識の同じような共通する人たちが、同じような暮らし方をするというコミュニティを作り始めているというところに行き着いて。

それに対しては、またいろいろディスカッションの時に、またいろいろお話ししたいと思いますけれども。もう、やはり今の地球のあり方、ものの経済のあり方に関して、非常に危機感を持った人たちが、自分たちだけでそういうコミュニティを作り始めている。

これは日本だけではなくて、アメリカだけじゃなくて、ヨーロッパ、世界同時多発的に、今の地球環境を意図した人たちが、こういうコミュニティを作って暮らし始めているというのは、やはり何かしらみんなで行動を起こさなければならないというのがあるのではないかと、というような感じを持っております。そんなところで私の話は終わらせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。(拍手)

宮崎 どうもありがとうございました。持続可能な開発から、Cradle to Cradle から、私たちの暮らし方、バイオミミクリーから、多様な面を説明していただきまして、ありがとうございました。

3.4 中村 陽一氏（立教大学教授）

宮崎 それでは続きまして、中村陽一先生から、これまでの発表者に対するコメントも、

もしあれば、また、先生ご自身もいろいろと活動をされておりますので、そういうご紹介もできましたらお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

中村 ご紹介をいただきました中村でございます。きょうは、一参加者としてゆっくり参加できるはずだったんですけども、甲斐さんの急なキャンセルという大変困ったことが起こりまして、甲斐さんはこのパネルディスカッションに推薦した張本人が私だったものですから、責任を感じましてですね、こうして加えていただくことになりました。

ただ、そういう事情自体は参加された皆さまには、直接は関係がございませんので、きょうのテーマになるべくかかわらせるような形で、私なりにお話をしたいと思っております。

まずですね、そんなことでちょっと急でしたので、私のほうでは、特に何か資料を用意するという余裕がございませんでした。後で、時間があればちょっと1枚だけ、図をお示ししようかなと思いますけれども、基本的には口頭でお話をさせていただくということでお許しいただきたいと思っております。

内山先生の基調講演に始まり、3人の皆さん、村上さん、あるいは今の吉村先生のお話をうかがっていて、それについて特に何かコメントするというよりも、少し、そことかかわるようなお話を、時間の中でさせていただこうと思ひまして、時間を見ながらやっていたできます。

私は、若干だけ自己紹介をさせていただきますと、もともと、現場、今、NPOとかNGOとして知られるようになってきた、さまざまな市民の活動の現場とこうした研究の場を持ちながらやってきました。

具体的にはNPO、NGOとかCSRであるとか、近年ではソーシャルビジネスとかコミュニティビジネス、そういったところでやっております。きょうは、そのテーマということではなくて、この21世紀社会デザイン研究学会が立ち上がる時、それから、その母体の一つでもある立教大学の21世紀社会デザイン研究科が立ち上がった時から、その中で北山先生をはじめとして、皆さんとご一緒してきた、その経験から、社会デザインとのかかわってきたお話をさせていただければと思っております。

きょうは、「自然と共生する社会デザイン」という全体のテーマとからむところの、とりわけ「自然と共生する」という部分で、私が何か直接からむお話ができるわけではございません。

この自然と共生するという部分を、先ほどの内山先生の基調講演も大変刺激があったんですけども、そこともつなげる意味で、あえて自然と共生するというのを関係性というふうに強引にちょっと読み替えまして、そこと社会デザインとをつなげるような何かお話ができればと思っております。

とは言いましても関係性と社会デザインというとすごく大きな話になっちゃいますので、二つほど具体的なテーマ設定をしたいと思ひます。

一つは、皆さまのところに、お手元に資料もないことですので、この二つのテーマ設定を書かせていただきます。

一つは、社会デザインというよりも、もう少し絞るといふか特化しまして、「コミュニティデザイン」ということとかかわらせたいと思います。もう一つは、私自身も、実は、その住人なんですが、「コーポラティブハウス」あるいはコーポラティブハウジングということですけども、そことかかわらせた話題提供的なお話と思っております。

まず、コミュニティデザインということですが、私どもの研究科もそういう領域を掲げているんですけども、海外では、このコミュニティデザインという言い方は、コミュニティデザイナーというその担い手も含めまして、かなり広がった言い方になってきております。

例えば、1990年に発行されました『コミュニティ・デザイン・フライバー』という本がありますけれども、これはランドルックヘッターという人の著作ですけども。ここではそのヘッターという人物はですね、ランドスケープアーキテクチャーなんですけど、彼がこういうふうに述べているんです。「町に住む人々が、計画作成に加わる時、私が作った計画はいつでも改良される」。

その町に住む人たちというのは、本質的な情報と重要なアイデアを持っている。例えばということで、私が、私というのはヘッターさんですが、「私などが聞いたこともないような珍しいトンボや、アヤメの生息する神聖な自然がある場所を知っている」、そのほか、いろいろと例を挙げているんです。

「コミュニティの人々が計画にかかわるか否か、これが住みやすい町ができるか、それとも住み難い町になるか、それを決定してしまう可能性がある」ということで、コミュニティデザインというのは、要は、「専門家が上から計画をして町づくりをするということではなくて、そこに住んでいる人たちが参加をしながらデザインを進めていく、これをコミュニティデザインと呼ぶ」というふうに述べています。それは、私もまったく同感する話ですけども。

さらに、このコミュニティデザインというのは、「町自体がクライアントなんだ」という言い方をしています。そして、その、後で触れられればと思いますけれども、今、一つのキーワードになっている「町づくり」という時に、解決すべき課題の一つとしてキーワードになっているのが、幅広い意味での「貧困」ということです。

その貧困であるというのは、多くの環境的資源へのアクセスが絶たれているということの意味している。コミュニティデザイナーというのはそれをどういうふうに回復、あるいは解決するのだろうという話になるわけです。

例えば、その時にさっきの内山先生の話でいうと、ある意味、技といふかアートですけども。環境的な不公正という状態が地域にある、それを正すということがコミュニティデザイナーの目的の一つになるわけです。それを地図に落とすという手法で、これはそんなに複雑な手法じゃないんですけども、人々の意識を目に見える形で、その環境的な不

公正というのを見せることで、そこに意識を向けていくようにするという例なんかを、いろいろ挙げていますね。

例えば、障害者が利用できないレクリエーションのための場所がどこかとかですね、公共資源において、最も顕著な不公平が見られるのはどこかとか、非常に排外的なイベントが行われる場所はどこだとかですね。それから社会階層もしくは人種によって差別が見られる公共施設とはどういうところなのか、というような。あるいは住宅地で非常にエクスクルーシブな、排外的な住宅地っていうのはどういう場所なのか、ということを示すということで、その町の課題が見えるようにするということです。

実は、こうした人たちによって1983年に『人間的なデザインマニフェスト』というのが出されていますが、その第1項にこう書かれてあるんですね。「デザイナーは、環境的公正の実現のために闘わなければならない」。ただし、これは非常に大事なことだと思うんですが、「コミュニティデザイナーは人々と共にデザインするのであって、人々のためにデザインするのではない」。この「共に」というのと「ために」との大きな違いということが強調されている。

そして、これは私も大変魅力的な表現だと思うんですが、「コミュニティデザイナーは、市民が自分たちの環境に関する想像力を表現する、そのことに力を貸すのだ」。きょうのお話の流れに読み替えれば、その市民が、自分たちが形成しているといいますか、自分たちがその中にある関係性、これを表現する、そこに、手を貸すという。そういう立場、スタンスが明確に表されているのかなと思います。

そうしたコミュニティデザインができることとして、住民、それから、時には外にある人たちが、共通するそこでの問題を解決するために、共同で働くという、そのプロセスの中で社会的なきずなを強める、そして、お互いの名前とか、それぞれが持っている技術といいますか、それぞれが持っている得意分野ですね、それを知り合って価値観や経験を共有する、それがコミュニティデザインの非常に重要な副産物なのだとっています。

そうした副産物というのは、社会的な阻害とか匿名性を克服することができる。まさに関係がそこで形成されていくということだと思います。

その対極にある、非常に均質で特徴のない環境、私たちがとにかくそういう町の中に住みがちになっている町の環境です。そういう場所であると、その場所からほとんど私たちは、何の意味もくみ取ることができない。その結果環境への無関心とか根無し草的な感覚であるとか、場所の喪失感覚が生じる。そこを超えていこうとするものであるというふうで紹介をしています。

これは、ある意味、コミュニティデザイナーという存在を意識する人々にとっては、ある種のテキスト的な紹介を非常にしている部分ですので、今、ご紹介しましたけれども、こうした考え方というものをある程度踏まえたものとして、恐らくコーポラティブハウスとか、コーポラティブハウジングというものがあると思います。

実は、私どもの研究科とも関係のあるNPO法人として、「21世紀社会デザインラボ」と

いうのがあるんですが、そこでですね4年ほど前にコーポラティブハウスの住民の意識調査を行いました。これは、実は、私の長い友人であります三浦展さんの『シンプル族の反乱』という、これはTKベストセラーズの新書の中に、調査の結果が納められています。

と言いますのも、これ、若干経緯をご紹介しますと、三浦さんが『下流社会』という光文社新書で大変売れていましてですね、印税がどのぐらい入ったかしれませんが、割とがっばり入ったらしいんです。そのままですと税金で持っていかれるだけだからということで、委託研究を何本か出しまして、中村さん1本かやらないかという話だったので、やるやるということでやったのが、このコーポラティブハウスの調査です。そこでは、少し具体的な数字もご紹介しますが、なかなかおもしろい結果が出ました。

コーポラティブハウスに関しては、きょう、お集まりの皆さんでしたら、ある程度ご存じだと思うんですけども、いろいろな定義とか歴史がありますから、実は、コーポラティブハウスといっても一種類ではないんですけども、今、割りかし、日本で多いのは企画会社土地を見つけて、集合住宅を建設する。ただ、普通のマンションのように勝手に、その設計したものを分譲するというのではなくて、まず、基本的な設計案は出すんですけども、まだ、粗々とした基本的案に共鳴できる人たちを集めて、その人たちが住戸を買うという形式の集合住宅です。

買った人はその住戸の間取りとか内装を自分の思いどおりに、自由設計と言っていますが、デザインができるというものです。で、実は、私も、今、西武池袋線の江古田の駅のすぐそば、北口、歩いて2分ぐらいのところのコーポラティブハウスに5～6年前から住んでいるんですけども、まさにこういうプロセスで出来上がったものです。

それは、一般の分譲マンションに比べますと、宣伝広告費が少なく済みますので、それから、私のところなんかはそうですが、場所によっては行政が駅前の密集した、かつ老朽化した住宅は、防災上とかいろいろな観点から何とか立て替えを進めたいという意志も持っているがために、今、補助金事業になっているケースもあるんですね。私のところはそれで、若干価格も下がったりもしますが、その分の費用ですね、内装、自由設計そのものに回せるわけです。ですから同じ地域に立地するマンションと同じ額で自分の思いどおりの、住まいを作れるということで、少しずつ浸透している。

ただし、実は、こういうことはかなりいろいろな意味で面倒くささを伴います。いろいろな話し合いをしなければいけない。それから分からないことも多い。しかし、私たちもそうですけれども、そういう面倒くささをかなり楽しめる人たちがそこに住むという。入居前からお互いの顔と名前も知って入りますので、その目的としてその関係性を作ることではなく、一緒にその集合住宅に住むという、ある意味フレームの中に自分たちが入ることによって、関係性が出来上がってくるということなんです。

その調査の結果ですけれども、そこに住んでいるコーポラに住んでいる人たち107名という数はそんなに多くはないですが、にかなり詳細理由を聞ききました。そうすると極めて顕著に出てきたのがコミュニケーション重視という傾向です。それから、基本的な属性

でいいますと、世帯主の年齢が 30 代、40 代がやっぱり多いですね。30 代が 36%、40 代が 26%、50 代が 19%でした。世帯年収は若干やはり高いということがあります。

それから知ったきっかけは、圧倒的に口コミですね。ですから、そういうことに敏感な人たちということも言えます。興味を持った理由というのが、第 1 位は自由設計だからということで 85%と高いですが、第 2 位は人とのつながりを重視したいと、これが挙がっています。それから、実際に住もうと思った決め手というのも、1 位は自由設計なんですけれども、2 位が立地、周辺環境、3 位が防犯面の安全ということですね。

つまり、実際に東京の場合にそうなんです、比較的緑が豊富な地域であったり、住民のいろいろな意味での質が高いという、そこが決め手になっていることがよく分かります。それから、以下、住もうと思った決め手の理由を聞いていきますと、日常的な人とのつながりというのが 61%です。これはもう、いわゆるマンションに住む人たちの意識とは、かなり真逆の傾向かなというふうに思っています。

それからお子さんのいる家庭ですと、かなり子どもの教育に良いというですね、その意識が強いのがよく分かります。何で子育てに良いと言っているかということ、環境に配慮した暮らしができるとか、それから、その家族の気配を感じる間取りが作れるとかですね。

それから実際の設計を見ますと、いろいろなお宅を可能な範囲で見せていただきました。子どものスペース、その間仕切りをなくした大空間というのをかなり取っていて、間仕切りする場合も引き戸でいつでも開けられるという、そういうふうになっているところが多かったというのが印象的でした。

それから、入居して良かったというところが、子どものいる世帯で多い項目は、子どもの社会性の向上とか、自然を生かした暮らしの工夫ができる。それから地域と一緒にあったイベント等々ですね。それから隣近所とあいさつするようになった、他人の子どもを気にかけるようになった、隣近所の子どもと会話するようになった、そういったところが非常に魅力として挙がっているということが、大変特徴的でした。

つまり、これは最近の、世論調査なんかは、NHK のなんかを見ても、だんだん傾向としては出てきているんですが。一時、自由を求めて人との束縛のようなつながりよりも、プライバシーを重視するというのが、戦後の一貫した高度成長期以降の傾向でしたけれども。それとは違う傾向がかなり出てきていると。

この三浦さんの本の中でも、こういう言い方をしていますが、「ソーシャルキャピタル指向」といいますが、人と人とのつながり指向が非常に出ているということが、紹介をされております。これは、こういう思考は、今、学生さんとつきあっても非常にある傾向です。先だって、ある場所で、日本的経営こうだったんだねっていう話をしておりましたら、団塊の世代、それから、その後続くわれわれの世代辺りも、やっぱりそういうしがらみがある意味うっとうしくて、そこから自由を求めたという生き方をしたんですけれども、むしろ学生さんは、「いや、かつての日本的経営のようなそういうつながりにあこがれますね」みたいな意見が結構多かったのが、私もそうでしたけれども、その時ゲストで

きてくれた私と同世代の人などもびっくりしておりました。

そういう関係性のあり方の、そこに対する向いている意識の違い、変化というものは、まさに冒頭で申し上げました、コミュニティデザインの必要性とか、コーポラが実際に広がっているということにつながっていると思います。

そうしたことというのは、冒頭に内山先生の基調講演の中でも、私も、その通りだというふうになさずかせてもらっていたことはですね、関係をデザインするというよりも、関係そのものがデザインの主体だという。これは、まさに、今、ご紹介したような事例の中でも、何か無理して関係性を作るというよりは、ある枠組みとかある領域での環境に身を置くことによってそこでつながって、出来上がってくる関係というものが自（おの）ずとそのデザインを方向づけたり決定しているなということに非常に私も感じます。

ただ、その時に、放っておけば何とかなるということではなくて、まさに技ですね、アートというものとそのデザインのあり方のつながりをどういうふうにつけていくのか。そこでできる限り差別とか排除の関係、エクスルシブな関係ではなくて、インクルーシブなデザインをどういうふうに構築するのか。そこは、やはり私たちが、今後考えていかなければいけないことではないかなと、あらためて思っております。

時間がきましたので、図はちょっと割愛させていただいて、また後のパネルディスカッションで少し付け加えたいと思います。

それから、うちの研究科の方々はやっぱこういうことに関心が強く、修了生なんですけど、こういう畑がついている、こういうエコアートを造ろうという本を出して、まさに実践の中から出てきた本ですが、こういう方々も出ております。

やっぱり社会デザインという言葉に引かれて来るような人たちに、ある共通した傾向の象徴的な例かなと思って、ご紹介を最後にいたします。それでは 20 分ぐらい経ちましたので、私のお話はこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

宮崎 どうも大変ありがとうございました。それでは、5～6分ぐらい休憩をした後に、ディスカッションに入っていきたいと思います。

3.5 ディスカッション

宮崎 コーディネーターを務めさせていただきます宮崎です。コーディネーターとしましては、こんなふうに進めたいなと思っております。

今回は、4人の方にプレゼンテーション、それから甲斐さんの代理にお話をいただきました。このお話を聞いた上で、まず、パネラーの方に、どんな感想を持ったのか、もしくは何か質問があるのか、そういうことをお話していただき、その後、会場の皆さまから質問なりコメントを受けてディスカッションを進めていきたいと思っております。

それでは、順番ですね、内山先生から、お願いいたします。

内山 いろいろな点で勉強になりました。つまり、何ていうんでしょうか、農村社会というのはさっき言ったように、長い歴史の中で自然のデザインというか、自然にデザインしてきたわけですがけれども、福祉社会というのは、特に、現代都市になってくると良い悪いの問題は別にして、変動の速さがエネルギーを生む社会というのを作ってしまったっていうのか。だから、次々に大学ができたり、再開発が行われたり、どれだけ早く変動していくのかみたいなことによって、雇用が生まれたりある程度市場が拡大したりという、そういう社会を良い悪いの問題として作ってしまったわけです。

この社会をどこに軟着陸させていくのかっていう問題は恐らく人類史として初めての経験なので、同じ都市社会でも例えば、ヨーロッパの中世の都市とか、あるいは日本の近世の都市とか、そういうものは一度で出来上がってしまうとある程度安定していくという、そういう持続型都市みたいなことであったんですけども。現代都市になっちゃうと絶えず作り替えていくという、そのことをエネルギーにして、ですから、かねてからそういう都市がどこに軟着陸したらいいのかというのが、ぼく自身の問題意識として思っていたんです。

本当に、そういう点で、こうすればいいというのは多分ないんだと思うんですね。まだ、それが見つかっていない。いろいろな実験とか試みとか、それが重ねられていって初めて、この辺に着陸すればいいというのが見えてくるというのが現状だろうという気がするんです。そういう点で話をうかがっていて、いろいろなやり方があるもんだという、その点で勉強になりました。

村上 まず、内山先生のお話を聞いて、西欧と日本の考え方の違いとか、自然とか、人間のとらえ方の違いというお話をうかがって、根底にはそういう違いがあるのかというのを感じつつも、今の若者とか私自身は、もう若者ではないんですが、私よりも若い世代の人たちの中にも、その根底にあるものっていうのがどれぐらい自然に伝わっていくもので、どれぐらい暮らしの中にないと伝わらないもので、あと、多分学校で勉強して伝わるものなのかですね、そういうところをすごく、もう少しお話をうかがえたらなというふうにも思いました。

私自身は、暮らしそのものが、そういう農村社会での暮らし方、祭りがあり、寄り合いがあり、お父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんがそういうことをしている中で、子どもが育つから、そういうものっていうのが自然に受け継がれていったんだろうと思うんですけども。最初に、結婚の話もされていたかと思うんですが、そういうのがなくなってしまうと、日本と欧米人の考え方が違うと、本当に言えるのかなというところが、ぜひもう1回うかがいたいなというふうに思いました。

今そういう昔ながらの暮らしの中にあつた、自然との共生というか、地域の人たちが協力しあいながら、自然と折り合いをつけながら、暮らしてきた知恵みたいなものを、もう

1 回若者たちが学べる場を作ろうということで、何か正式な名前は忘れたんですけども、ふるさと協力隊というような仕組みを作っていて、1年間、若者を募集して田舎にステイさせてもらって、田舎の地域づくりとかにかかわらせてもらうという、国内留学だと思うんですが、そういうプロジェクトをしていらっしゃる方々がいたり、あと、森の聞き書き甲子園があったり。森づくりのプロジェクトで、森の中で暮らしてきた方々の知恵を、若者たちが話を聞きに行き、聞き書きをして伝えていくことも、今、その人たちの知恵がなかなか受け継がれない中で、若者たちがそれをまずは聞き取って伝えるという役割をするんだけど。その話を聞きながら、自分の暮らし方だったりとか、今の社会のあり方だったりというのを見直しているような取り組みも行われていて、そういうことは、すごく大切だし、すごく興味深い意義ある取り組みだと紹介しています。でも、本当に、そういうことだけで、最初に内山先生がおっしゃった、日本人的な民衆思想というのが受け継がれていけるのかなというところを、とても関心を持ってうかがいました。

吉村 きょうの話は特に打ち合わせたわけではなかったんですが、最終的には、やっぱり、その人というのは関係性を、やっぱりもう一度求めているのかなといったようなところで、落ち着くのかなと思ったんですが。やはり、人の生き方はやっぱり多様性が広がっているなということを感じたのが、私の今回の発表を聞いての印象です。

ということは内山先生が、現代都市では変化の速さ、その速さが変わることによってエネルギーを使っているといったように、この日本史というのは、やっぱりそこの中に入ってしまった人たちというのは、変えられないんじゃないかなというところが一つあります。

それと関連して、今度はスローライフとか田舎暮らしとか、時間をかけて手間をかけて、いろいろなことを楽しみながら、日々の変化を感じながら生きていう立場ですね。

それからもう一つ、ビジネスの社会に動かされているような人たちもいるといったようなことで、やっぱりますますこの人の生き方の多様性というのは、広がっているし、広がっていくんだろうな。だから、やっぱり私は、どの生き方をするのかという根拠は、自信という、自分の生き方は、自分の価値観を明確にしながら、これからは生きていけない、しんどい世の中になっていくのかなんていうことを感じた次第です。

私は、やっぱりバイオミクリーとか、生態系に学ぶ物づくりとか、それは一つの方法として、私はそういったように思うんですが、それを相いれない人たちがやっぱり何割かいて、そういったような人たちもいわゆる近代的な、科学技術の最先端を使いながら、エネルギーをたくさん使って、ずっと、今、その流れを止められないような人たちも、やっぱりそれを一緒にしていく。その流れでどうやってこれから続けていくのかなと、そんなふうな印象を持った次第です。

中村 今の内山先生の、現代都市はどこに軟着陸したらいいのかという、大変、私は、重い問いかけだなあと思いますし、これからいろいろな新しい試みをやるに当たっても、絶

えずどこかで頭の隅で、奥の方で、持っていないてはいけないことかなとあらためて思いました。

そのときに、私も、全く自信がないんですが、少し大きくというか、大げさに言えば、歴史なきファミリーに結構なっておりますので、その歴史なきファミリーの間で、関係性ってどうなるのかっていうことを、自分がコーポラに住みながら、やっぱりいろいろと考えてしまうところがあります。

全く今までなかった新しいものをいくら新しい取り組みであると主張するといつて、全く今まで誰も考えたことのないようなものを打ち出すというのは、私はやはり無理だと思います。

これまであったいろいろな試みの組み合わせ方を変えながら、その組み合わせが変わるところで何かこう新しい反応として出てくるようなものを、私たちの、さっきコミュニティデザインのところでは言いましたけれども、いろいろな取り組みの中に見ていくことができるのかなというのを辛うじて言える程度かなと思います。

例えば、その、自然の世界とか死者といったキーワードになりますと、まさに、その部分は全くなくなっているわけじゃないないんですけれども、現代都市の生活の中では極めて希薄になってますので、そうしたものがどういうふうには私たちのいる共同性ということをやったりするんですけれども、現代都市の共同性として生まれていけるのかどうか、これは、ちょっと先の長い話を言うようですが、例えば私の住んでいるコーポラはまだ5～6年ですから、これが最低でも30年ぐらいいないと、やっぱりなかなか見えてこないかなと思いつつ、でも、面白い兆候はいっぱい出ていまして、私が、今一生懸命やっているソーシャルビジネスという分野も、ビジネスというものがある方向に発展してきたことによって、生まれてきたデメリットのところにみんなが思い至るようになって、そこから逆にビジネスの本来のあり方とか、そもそもビジネスって何だったのという問いかけから、ソーシャルビジネスという話になっているわけです。

コーポラも含めて、今の取り組みというのは、さっきも日本の経営が若い人たちの反応をご紹介しましたけれども。かつて自分たちが、何かいやだなと思っていたものが、逆に今度はそこに原点にあったものの、ある意味あえて言えば良さっていうのが、見直されるような、そういう繰り返しの中で、私たちは一体何を自分たちの人生の指標っていいですかね、道しるべにしていけばいいかなとあらためて考えたいと思っております。

宮崎 ありがとうございます。今回、コーディネーターがあまり発言しちやいけないんですけれども。私自身は、生物多様性政策というものを研究してきまして、その中では、企業の社会的責任との関連を問うてきたわけなんですけれども、今年は、COP10があつて、また、国連生物多様性の年ということもあつて、世界的に生物多様性というのは非常に注目を浴びたんですけれども。世界の議論というのは、どんどん経済発展をしている中で、どんどん自然が失われていっている。特に、途上国では自然が減っている。じゃ、こちら

のかかわり方はどうしたらいいか。それはもう先進国に責任があるから、先進国が経済発展にふさわしい技術を移転し、途上国を助けなければいけない。

そういう構造の議論ばかりがされていて、きょう、内山先生の提起された自然感のような話は全く議論されずに、ただ、決まった考え方の下に、結局はお金だと。どれだけ生物資源から出てくる利益を配分するかということが、非常に強調されてきています。本日の内山先生のお話は、そういう意味では、私にとっては新鮮なもので、この点を考えてみなければいけないなというふうに思っています。

また、今回の COP10 では、日本では里山イニシアチブというので、提起されたんですけども。その里山イニシアチブの何が問題であるかということ、里山は荒廃しているから、そこにもともと生息していた日本の固有種が絶滅の恐れがあるから、じゃ、里山を守らなきゃいけないのではないかなというような、そういう生物のために何かそういう里山というのは見直さなければいけないという話がありました。

これは日本だけではなくて、ほかの国でも、自然と共生するような農業とか社会というのが、大事だということは言われています。人間と自然はそういう関係があるということは分かるんですけども、西洋的な自然保護の考え方と、日本の考え方の違いから、どう考えていけるかということについて、非常に考えさせられました。

ということで、パネラーとしての感想を一応お聞きしましたので、皆さま方、会場の方から、感想なり、またご意見なり、また講師の方々に質問などがありましたら、ご自由にご発言していただきたいと思いますので。ご発言される方は恐縮ですけども、挙手をしていただきたいと思います。

澤谷（会場の参加者） 文京区で環境の NPO をやっております澤谷と申します。きょう、内山先生の話、非常に面白く聞かせていただきました。それから、いろいろコーポラティブハウスの話とか、吉村先生や中村先生の話も非常に面白く聞かせていただきました。ESD については、昔から聞いているので、よく知っていましたので。

それで、要するに内山先生の、特に、話の中で、ちょっと、今、題名は忘れていますが、高校の予備校の先生が書いた本で、江戸時代に外国人が来て、日本の文明がいかに素晴らしかったかというのが書かれた本があったんですけども。

その著者の、要するに結論は、それをもう西洋文明を導入して、ぶっ壊してきたんだと、その 100 年が今の帰結なんだということだというふうに、怒っています。

それで、だから、やっぱり元の 100 年前の日本の美しい日本に戻るということについては、やはり、その 100 年間の努力、それは今、坂の上の雲みたいにやっていますが、そういう努力でやってきた日本人の結果なんで、それを受け入れざるを得ないと。

ただ、そのときに、今、日本が非常にいい状況は、少子化が起こっていると。これがかなりの、今の出生率だと相当早く人口が減少する。この減少は非常に良いんじゃないかと思うんですが。その、政府は日本人はみんな間違っ、少子化内閣とって、人口を増

やそう増やそうとしているんで、これはむしろまずいんじゃないかというふうにぼくは思っています。

それで、それからもう一つは、何かあると経済成長がないといけない。これも、今の経済学の原理からいくと、経済成長がないとみんな不幸になるからという結論に、原理的になるようなんですけれども。ぼくは、経済が間違えていて、経済成長しないでも、皆さん幸福になれるような、新しい経済論を考えてもいいんじゃないかなと。

それで、たまたま、そのファクターに書きましたのは、われわれが出しています環境情報誌、2カ月に1回出していますが、ここに巻頭言の論文で、堀田力さん、ご承知だと思いますが、公益さわやか財団ですが、これを堀田さんに環境の幅広い問題というのを書いてもらったんですが、その結論として彼も同じことを言っているんです。

「いかに多様に幅広く環境保護活動を進めようとも、環境問題は当分解決しないだろう。それは環境問題を引き起こす元凶である、人間が増え続けているからである。私は、人間が環境を破壊しないで地球と共存できるためには、総人口を 20 億程度減らす必要がある。全人類が総人口減少に取り組むべきときに来ている」と。まさに、彼がそういうことを言っているんで、私は、非常に意を強くしたんですけれども。もう少し少子化問題を、減らす方向で考えた方がいいんじゃないかなと。

それで、幸せに、日本人が暮らせるような、そういう社会システムを作ると。そうすると、何か、内山先生がおっしゃっていたようなものが少し出てくるんじゃないかなと。さらにコーポラティブハウスなんかで幸せに暮らせるんじゃないかなと、そんなふうにお話を聞きながら思っていました。

宮崎 ありがとうございます。ご意見ということで拝聴させていただきました。ほかにいらっしゃいますでしょうか。

森（会場の参加者） つなご研究所というところに所属しています森と申します。内山先生に質問です。

関係が主体としてデザインしていくということですね、すごくすっきりするな感じはするんですが。一方で、今の例えば携帯ですとか、ツイッターですとかですね、関係そのものが、さっきの都市が変動することによってエネルギーを生み出していくと。同じように、ものすごい速いスピードで関係を結んだり切れたりして、それが、例えば携帯のようなメディアによって、すごく加速しているのかな、という感じがすごくするんですよ。

そうしたときに関係がデザインしていくときに、今、先生が提起されたスピードっていうことですが、何て言ったらいいかわからないんですが、そういうような速さの問題がそれにどうかかわっていくのか。特に、メディアっていうことを考えたときに、この時間的なスピード、これをどう考えていったらいいのかなと思ってですね、ちょっと先生のご意見を聞かせていただければなと思って、ご質問させていただきました。

内山 自然の問題を時間の問題から考えた場合に、自然も変動していくわけです。それは、ゆっくりゆっくりですが少しずつ変わっていく。問題は自然が変動に対応していく、それだけの時間保障を与えて変動を許していくのか、あるいは自然は変動できないスピードで物を変えていくのかというのは、きょうのテーマの自然と人間の共生という、重要な問題なわけです。

例えば、具体的にいうと有明海で諫早湾の干拓というのが行われて、まだもめていますけれども。ところが有明海の歴史というのはずっと干拓をしていく歴史なんです。江戸時代から少しずつ、ずっと干拓をしていたわけです。

そうすると干拓推進派の人は、いや、有明海の干拓っていうのは江戸時代からやっていたんだよと。そこそこからずいぶん有明海は、塩湖は少し狭くなってきたんだと。それを新しい技術を使ってやっているだけであって、別に、諫早湾で農地を作って何が悪いのかと、こういうふうな意見が出てくるわけです。ところがこれは全然違うわけです。

というのは江戸時代の干拓というのは、いわば農民が自分のうちの畑の先っぽを少し埋め立てるといって、いわば考え方としてはそういう感じなわけです。非常にゆっくりしていたわけです。ゆっくりゆっくり干拓していくと、その場合に、ちゃんと干潟ができて、つまり農地ができたころには干潟ができています。それで有明海が維持されているんです。もちろん、それは無限ではなく、いつかはなくなっちゃうかもしれませんが。

そうやってゆっくりやっていく以上、限界もあるわけで、つまり、そんなに深いところまで埋め立てるわけではないわけです。だから、自分たちで土盛りをしてできる範囲でやっていく、そうするとその間に新しい自然体系が出来上がる。有明海ってそういう歴史だったわけです。だから、これは変動に自然がついていけるだけの、結果としては時間を保障したということになるんです。

今度の干拓というのは、いきなり締め切り堤防を作ってばさっと切ったわけです。これをやってしまうと、自然がついていく時間は確保できない。だから当然ながら、自然の破壊が激しく起きると言えます。だから、時間をどこまで保障するかというのは、それは極めて重要な問題で、それは人間社会でもそうなんですけれども、今みたいにどんどん変わっていくと、一部のものにはついていけるけれども、全部にはついていけなくなっちゃうわけですね。例えば、つい 10 年か 20 年前にパソコンが入ってきたとき、あわてて習熟する。だけど、そのすべてについていくことはできないわけで、結局、自分たちで使うメールとネットと、あとはワードの機能ぐらいで、それぐらいでいくわけです。

それをすべての変動についていこうとすると、結局、ついていききれないからほかが破壊されてしまう。だから、ごく一部しかできない。それは、だから今の変動というのはすべてそうなんだけれども。そのすべてについていくことはできない人たちを作ってきている。それは、全員がついていくことができないと言ってもいいです。

だから、金融商品なんかでもどんどん新しいものができて、どんどんそれが世の中を動

くんだけれども、そんなものはぼくらには何がなんだかさっぱり分からない、というふう
に言った方がいいぐらいの状況です。

だから、人間の方もそうなんだけれども、社会は変動していく。それは、どんな昔だっ
て少しぐらいは変動していくわけです。その変動に対して人間が対応していくだけの時間
量を保障できるかどうか。これが対応できるのであれば何とかなっていく。

ところが人間が対応できないスピードで変動していってしまうと、その一部の部分だけ
で暴走してしまう。結局、対応できるのは全員が一部なわけです。だから、金融商品を扱
っている人たちは、そこだけ分かるわけです。そこで暴走してしまうわけです。という現象
が起きてきて、結局社会破壊につながってしまう。

だから、この点では自然も人間も含めまして、変動に対応する時間を保障しない変動と
いうのは、すべて悪であるというふうに、ぼくは言い切ってしまった方がいいというふう
に思って、つまり、必ず壊れるものの方が大きくなってしまいます。

ただ、人間が変動に対応していくときに、頭では分かって何とかついていったというの
とは別に、やっぱり体もついていかなければいけないし、それからさっきの言葉を使うと、
霊性とか、生命性とか、その部分もついていかなければいけないわけです。

そうすると、今の場合には、変動というものがようやく知性の領域で必死についていく
ということ許しているだけであって、身体性とか霊性とかいうレベルでは、全くついて
いけない変動を起こしてしまっている。

だから、それはホームページだと思ったら、そのうちツイッターだとか何だとかミキシ
ーだとか次々に出てくるわけだけれども、あれは理解してついていけるだけであって、あ
の世界に体が馴染（なじ）むということはないしですね、ましてや生命とか霊性みたいな
ものが馴染むということはない、ということは何だか馴染んでいないということなんです。

だから、新しいものができてくるとすぐ変わってしまう。つまり、体や生命そのものが
馴染んでいないわけですから、そうすると、もっと便利なこれができるよといった瞬間に、
過去のもの消えていく。

そういう点では、自然に対してもそうだけれども、人間に対しても非常に過酷な社会を
作ってしまっていて、その問題を含めてどこに軟着陸するかということが、本当に問われ
なければいけない。だから、そこには時間保障という問題を絶えず念頭に入れないといけ
ないんじゃないかと思っています。

ただ、不思議なことに過去に馴染む、つまり一度忘れた過去に馴染むということになる
と、以外と馴染むんです。先ほど、冒頭に言ったように例えば、うちの村の結婚式でも、
新婦は東京の人なんです。村のことは何も知らない人なんです。ところが、わずか1年ぐ
らい村にただけで、それで結婚式は済む、まさに自然と村そのものが祝福する結婚式、
昔の形です。そこに戻したいという、出てくるわけです。

だから、そこにあるものはやっぱり、それをどう表現していくか、非常に難しいわけで。
ユング的に集合的な無意識なんていっても、いわゆる意義があるかどうか分かりませんけ

れども、とにかく何かやっぱり蓄積してきた何かがあると。

それは眠っているんだけれども、目を覚ますと意外に馴染むと、だから、そういうことをしたら、いい地域ができるかどうかなんていう、そういう結婚式をしたり、そんなことはぼくにもよく分からない。

ただ、そのやり方には、村中の人たちが馴染む、そこで村中と人って、今、うちの村では15%は都市の出身者ですから、その都市に出身者たちも馴染むということですから。だから、そこら辺のところは何ていうんですか、変動していくものは時間の保障がいるんだけれども、昔を振り返りながらそれを生かす、そこにおいては以外と人間は馴染んでいるんです。

そこら辺で時間とか、過去の時間をどうとらえるかというのは、これもはっきりした結論をぼくは出すことはできないんですけども、一つの課題だなというふうには思っています。

宮崎 ありがとうございます。私も、最近ついていけないと思うときがよくあるんですけどもね。(笑) 何となく、私も少し安心しました。

北山 折角、いいお話なのでいろいろ質問してみてください。

中村 じゃ、ちょっと会場の皆さんが質問を考えている間に、ちょっと、内山先生に質問してよいでしょうか。

今のお話は、なるほど思ってたんですが、私がかかわっている領域だと、例えば、ある争点になっているような地域の町づくりの課題に関して、市民的な合意形成が必要だということで、そうした取り組みを、例えば、環境問題なんかが起こる場合にやっています。

それで、今のお話で私は、なるほど、その技術との合意形成とか、自然との合意形成というのが、もちろん技術か自然は人間と同じような意志を持つわけじゃないので、これは杞憂(きゆう)にしかすぎないのかもしれませんが、技術との合意形成とか自然との合意形成ということが大事なんだなというところまでは分かるんですが。

そのことについて、例えば技術のことだと、最近私も勉強している途中ですが、社会技術論のようなものが出てきて、ある意味、バランスの問題なのかもしれませんが、技術の暴走というのに対して、社会的な合理性というところから歯止めをかけるというような考え方が出てきますよね。

それもある種の社会デザインではないかと思うんですが、内山先生のお考えでいくと技術とか自然との合意形成とか、関係のところでは考えたときに、この社会デザインがなし得るものと、その何ていうんでしょうか原始的なこととかいうか、その辺り何かちょっと内山先生のお考えを聞けると、私は、大変ありがたいと思うんですけども、どうでしょうか。

内山 近代的社会ができてきたときに、人々がどう考えたかという、うまく発展させていくことができれば、将来的には矛盾のない社会ができるという、一つの夢物語があったと思うんです。

その一つの極致にいったのは、やっぱり社会主義思想です。理想的な共産主義社会ができればあらゆる矛盾から人間は解放されると考えた。

そこまで極端でないとしても、やっぱりそれがデモクラシーという考え方にしても何にしても、それが非常に上手に発展して定着していけば、次第に矛盾のない社会に向かって歩いていくという、それが近代の一つの合意だったと思うんです。

ただ、今日になってくると、この合意が妥当だったかどうかということが、やっぱり問われているわけで。というのは経済発展という点で言えば、先進国に限定すれば、間違いなく経済発展した。しかし、そのことによって矛盾がなくなったかという、別の矛盾が大量に発生してしまったということが、今では誰もが気がついている。

それから、あるいは、例えば、昔の共同体の煩わしさを逃れて、都市で自由な市民になろうと、これは多くの人たちが考えた。ところが今になってみると自由な市民よりも、バラバラになった人間の問題というのが大変重要になってきて、それで、コミュニティとかそういう問題を、みんなで必死に議論せざるを得ない、そういう状況です。

こういうことが示していることは、さっき言った近代の何か理想の社会に向かって歩み得るという一つの暗黙の合意です。そのこと自体が、この発想が間違っていたと。むしろ、そうではなくて、どんな社会でも矛盾があるし、内容が違うんだけれども大なり小なり絶対矛盾があるんだということを合意にした方が良かったですね。

そうすると、そのときに問題になることは、矛盾があるんだならば、矛盾は当然ながら直さなければいけないわけで、直しても新しい矛盾が出てくるかもしれませんし、それから、矛盾の中のもの、ちょっと許容すれば何とかなるといふ矛盾もあるけれども、これは、絶対にいけませんという矛盾も当然ながらあるわけです。

そういうものを、大きい矛盾であれ小さい矛盾であれ、気がついたときにそれを直す力を、人々が持っているかどうかというのが非常に大事なわけです。だから、例えば、町づくりをしていく場合でも人間が作っていく以上、理想の町づくりなんてあり得ないわけで、そこにはできるだけ理想のつもりで作っても、また、矛盾は出てくると。

問題は、そのときに、それにかかわった人たちが、修正する担い手になれるか、結局、修正する担い手になり得るかというのは、個人の問題ではなくて、やっぱりここにも関係の問題があって、例えば、町づくりなら町づくりを介しながら、新しく生まれてきた関係というのがあるわけで、その関係がきちっとしていれば、そこでまた、じゃ、ここで修正しようというものが見えてくるんだと思うんです。

だから、自然と人間の関係とか、そこにかかわってくる技術の問題とかいうのも、理想のものなんかはあり得ないと。むしろ、絶えず修正能力をわれわれ自身が持っているかど

うか。さらに、修正をも可能にする関係を持っているかどうかという、その問題に尽きるんだと思うんです。

その点からいうと今の社会というのは非常にまずいところにきていて、修正できないものが大量に発生しちゃっている。例えば、原子力発電なんかもそうですけれども、これはちょっとまずいから、われわれでちょっと直そうよと、これは全く無理な話です。だから、やるか廃止するかという、それしかない。

廃止したとしても、その後の廃棄物処理をどうするかとかで、また、えらい問題が起きてきて、しかも廃棄物処理になるとぼくらがスコップを持って行って、じゃ処理します、全然できないわけだから。これもまた専門家とか、専門企業というものに丸なげするしかないのです。

だから、あらゆる問題がそんな感じになってきて、われわれがタッチできないところに技術の世界があったり、タッチできないところに自然と人間のあり方が大幅な変更をさせられてしまうということです。

だから、こういうあり方はやっぱりだめだという部分をやっぱり考えなければいけない。つまり社会には常に矛盾があって問題が発生するというを前提にするならば、それは問題や矛盾が起きたときに直ちに変わっていき、その関係のあり方というのをどう見るかということです。

そこに軸を置かないと、絶対この問題は解決しない。だから、ぼく自身は、やっぱり、何か理想的なものを作っていけばいつかは矛盾がなくなるんだという近代の発想が、結局、ぼくらの手の届かない巨大なシステムとか巨大技術とか、そういうものを大量に作り出してしまおうという、この問題をどう見ていくかというのは結構大事なという気がするんです。

宮崎 ありがとうございます。会場から、どなたか。はい、お願いします。

会場参加者 本日、いろいろな話を聞いていまして、大変、今の日本は少子高齢化、特に、地方都市の人口減、上野村に限らず各地方に行きまして、どんどん過疎化になっていく。私はしょっちゅう地方に行くんですけども、子どもたちの町の中で遊んでいる姿がほとんど見えないんですね。建物は何が建っているかというと大体学習塾、予備校等々の建物が道周辺にたくさん建っている。

ということは、やはり子どもが少なくなってくると勉強をさせる、親が一生懸命やる。そういう中で社会全体が少子化になると、先ほどの話ですけれども、人口が多すぎる等と。

やはり人口が減って経済発展というのはあり得ませんし、また内山先生のおっしゃるように、やはり矛盾というのがあるんですね。開発の裏にはやはり、大変な乱開発によって自然を失われていくと。こういう問題をどういうふうに解決していくのかということは、今の日本の一番の悩みだろうと思います。

こういう中で、日本がどんどん劣化してきていると。劣化してきている原因の一つは、

経済成長がストップしている、停滞してきております。人口がこれから減っていくでしょう。こういう中でやはり非常に経済的に高齢化になる、子どもが少なくなる、当然やはり若い人たちも、最近言われていますように税金の負担がどんどん多くなるのは、これは致し方ない、社会情勢から。

これをどういうふうにデザインしていくかという、人々とともに先ほどお話がありましたけれども、まさにそれをどういう形で解決していくかと。非常に難しいのが、私は、現状だろうと思っております。そういう中でやはりこの学会に、私が出席をさせていただき、いろいろと考えさせられる、非常に重い気持ちに、正直なりました。

そういうことでやはり、現実との政治経済、置かれていることを考えますと、非常にやはり日本の国は大変な問題を抱える昨今であります。そういう中で、このお話を聞いておりました、自然をやはり失いたくない、どの国民においても同じだろうと思えます。どの都市に行きましても、青森に行きましても、あるいは鹿児島に行きましても、大変やはりそれぞれ高層ビルが建っているのは、これがやはり都市化、これが人々が喜ぶと、それぞれに特色があってやはり、私はそれぞれの地元の人たちに喜ばれる。

そういう特色を失って、みんなやはり東京と同じように、大阪と同じような町づくりをしている。こういう間違いこそデザインを直していけないんじゃないかというふうに思っております。この辺について諸先生のお話をお聞かせねがいたいと思っております。

宮崎 ありがとうございます。時間もだいぶ迫ってきましたので、今のお話への応えになると全く思いませんが、私なりに、今回のお話をまとめてみますと、今まで普通に考えられている自然と人間との関係というのは、日本人の伝統的な自然観とはやはりだいぶ違うものであり、特に、欧米のそれに比べてだいぶ違うということと、日本の自然観を基に自然と共生しながら、満足度の高い生活をされている方がおられるということが言えると思えます。今、都会の中ではですね、コーポラティブハウスのように、そういうものを建てようという動きもありますが、今後どのようにさらに広がっていくか、それからさらには、教育の問題、それから物づくりの社会、そういうところでも、いかにそういう考え方を発展させていくかというのが、今後の課題ではないのかなというふうに思えます。

時間もそろそろ切らないと総会が始まりませんし、総会が終わらないと懇親会も始められませんので、(笑) 大変申し訳ありませんけれども、これで一応パネルディスカッションとしては、締めにさせていただきたいなと思えます。どうも今日はありがとうございました。

(拍手)